
学輪 IIDA 共通カリキュラムフィールドスタディ 2023

ソーシャルキャピタルフィールドスタディ報告書

令和5年8月16日(水)～19日(土)

目 次

事業概要	・・・P1
カリキュラム	・・・P3
参加者名簿	・・・P4
実施後アンケート	・・・P5
感想レポート	・・・P17

■令和5年度 学輪 IIDA 共通カリキュラム・導入コース：

ソーシャルキャピタル・フィールドスタディ (FS) の概要

1. FS の概要と到達目標

近年、地域経営やガバナンスの在り方を考えるうえで、ソーシャルキャピタル（社会的関係資本）という概念が注目されています。住民自治や行政との協働によるまちづくりを確立するためには、そこに住む人々のつながりと協力が前提条件となります。ソーシャルキャピタルとは「社会的信頼・互酬性の規範・ネットワークなどの社会組織上の特徴であり、市民社会の発展に不可欠な要素」と定義されています（R. パットナム、OECD 他）。本 FS では、ソーシャルキャピタルの概念・理論的枠組みを講義したうえで、フィールドスタディ、市民活動実践者の報告を含むワークショップ（WS）を通じて、飯田のソーシャルキャピタル（SC）を可視化し、その実態に触れられる機会を提供します。ソーシャルキャピタルとは何か、ソーシャルキャピタルを育むもの、地域文化創造・まちづくりへの発現について調べて検討します。

2. 飯田で学ぶソーシャルキャピタル FS の意義

近年注目されている「ソーシャルキャピタル」については、座学だけでは十分な理解が進みません。飯田には豊かなソーシャルキャピタルが蓄積し、それが地域文化創造・まちづくり・環境運動などに表出しています。この FS では飯田市と市民活動実践者の協力を得て、実践者へのヒアリング調査機会が提供されるなど、フィールドワークの条件が整っています。ここに飯田に学生が集う必然性と価値があります。また、複数の大学の学生と地元高校生が共に学び、交流することにも意義があります。

3. 日 程

令和5年8月16日（木）～19日（日）3泊4日 *高校生は16～18日、宿泊無し

4. カリキュラム概要と特徴 （プログラム参照）

(1)カリキュラム構成

カリキュラムは、①事前学習、②コアプログラム、③事後学習から構成されています。

①事前学習

事前学習は、①オンデマンド動画配信講義によるソーシャルキャピタルの理論学習、飯田の地域自治と公民館に関する学習、②調査対象事例の事前学習から構成されています。また、高校生には事前に合同学習会を開催し、ソーシャルキャピタルへの理解を深めるようにします。

②コアプログラム

3日間にわたるコアプログラムは、①講義・まち歩き・ミニWS・対談（飯田市街地のまち歩きとまちの説明、飯田の特徴的なソーシャルキャピタル）と市民活動事例の調査・報告から構成されています。事例調査・報告は参加大学生と高校生とのグループワークです。各班は、参加大学・高校の混成チームとして構成されます。地域の活動リーダーからヒアリング調査を行い、活動の経緯・組織・内容・成果、成立要因、ソーシャルキャピタルとの関係性について検討分析し、報告会で調査結果を発表します。統括討議では、地縁型市民活動とテーマ型市民活動において、活動の成立要因を整理し、ソーシャルキャピタルがどのようにかかわっているのかを議論します。

③事後学習

参加学生は振り返りレポートの作成・提出などを通じて事後学習を行います。また、各参加大学・高校

では、事後学習として振り返りレポートの発表会を行うことも推奨されます。

(2)調査対象事例

調査対象事例は、以下の地縁型活動 2 事例、テーマ型活動 1 事例です。

活動団体	活動内容
千代しゃくなげの会 (地縁型)	<ul style="list-style-type: none"> ・千代しゃくなげの会は、地域住民が地元の保育園閉園の危機をきっかけに立ち上げた社会福祉法人。現在、保育園を 2 園とデイサービスセンターを 1 ヶ所運営している。 ・基本理念のポイントは、①地区一人一人が直接的または間接的に運営に関与、②地域の子供やお年寄り地域で守り育てるである。 ホームページ http://www.mis.janis.or.jp/~chiyo932/index.html
天竜川鷺流峡復活プロジェクト (地縁型)	<ul style="list-style-type: none"> ・地域内の共通の課題解決のために、事業者と地域が連携し協働で取り組んでいる事例。 ・竜丘地域自治会と事業者（天竜舟下り株式会社）の連携で鷺流峡の環境美化に取り組むことにより、住民等の美化意識向上を図るとともに、良好な景観の維持、不法投棄やポイ捨てが行われない地域づくりを目指している。 ・放置竹林の伐採、維持管理作業、周辺の清掃等の景観保全に努めながら、環境教育・産業という視点で、竹を使ったいかだ下りや、竹ボイラーのエネルギーへの活用、メンマの開発販売、竹灯籠看板の製作販売を行うなど、プロジェクトは様々な取り組みへと広がっている。 ホームページ https://garyukyo.org/
NPO 法人 国際りんご・シードル振興会 (テーマ型)	<ul style="list-style-type: none"> ・飯田で歴史的・精神的にも特別な存在である、りんごを大切に思い、かつシードルという新たな文化の構築を目的として、2013 年から活動を開始している。 ・「シードル」をテーマとした様々な取り組みに挑戦し、地域内でのシードルの知名度向上、醸造や消費の促進に努めている。 ・異業種間連携による地域経済の振興、国内外の生産者との親交を目指している。 ホームページ https://pommelier.net/

4. 宿泊（大学生）

1 日目、2 日目の宿泊は、飯田市の公共施設に宿泊します。

（男性：域学連携交流施設 さあくる、女性：りんご並木のエコハウス）

5. 農家民泊、アクティビティ（大学生）（プログラム参照）

3 日目の宿泊は、飯田市内の農家に宿泊します。

4 日目は、農家民泊などの体験型観光を実施する南信州観光公社の取り組みについての講義、アクティビティとして飯田市龍江地区に伝わる伝統人形芝居今田人形の体験と、農業法人今田平りんご畑での焼肉を行います。

6. 参加者（参加大学・高校）

参加人数：大学生 19 名、高校生 9 名

- ・参加大学：大阪商業大学、東京都立大学、東洋大学（教員）、名城大学、立命館大学
- ・参加高校：飯田高校、飯田風越高校、下伊那農業高校、飯田女子高校

7. 参加費用

大学生：32,000 円（食事代、宿泊代、市内交通費、アクティビティ代含む）

高校生：3,000 円（市内交通費、一部食事代含む）

*フィールドスタディ当日の受付時に集金します。

ソーシャルキャピタルフィールドスタディ日程

テーマ：飯田の市民活動を通して、その背景にあるソーシャルキャピタルを理解する

期日	時間帯			テーマ	講師	会場	
	開始	終了	分				
事前学習	8月上旬			・動画①ソーシャルキャピタルの理論 ・動画②市長講義 ・動画③飯田の住民自治と協働のまちづくり（公民館を含む）	(名城大学 福島 茂 教授) (飯田市長 佐藤 健) (飯田市職員)	オンライン動画	
1日目 8月16日 水曜日	12:45	13:00	15	受付（参加費支払い）		飯田市民館多目的ホール (ムトスぶらざ2階)	
	13:00	13:30	30	趣旨説明・オリエンテーション			
	13:30	14:00	30	1 住民自治と協働のまちづくり	飯田市職員		
	14:00	16:00	120	2 まち歩き&まちづくり説明 ※2グループに分かれてまち歩き	(橋北地区) 橋北まるごと博物館研究会 竹本 良男 氏 (橋南地区) 橋南公民館 今村 光利 氏	菱田春草生誕地公園～旧飯田 測候所～くつわ小路～エコハ ウス～りんご並木	
	16:00	16:10	10	休憩		飯田市民館多目的ホール (ムトスぶらざ2階)	
	16:10	17:10	60	3 飯田のソーシャルキャピタル&WS	名城大学 福島 茂 教授		
	17:10	17:20	10	休憩			
	17:20	18:15	55	4 事例調査の進め方と準備①	担当教員による指導		
		18:15	18:30	15	高校生帰宅 大学生は食事・入浴へ移動		タクシー
		18:30	19:45	75	大学生食事・入浴		砂払温泉
	19:45	20:00	15	大学生宿泊場所へ移動		タクシー	
				大学生宿泊：男性→域学連携交流施設さあくる 女性→りんご並木のエコハウス		域学連携交流施設さあくる りんご並木のエコハウス	
2日目 8月17日 木曜日	7:45	8:15	30	大学生移動：宿泊場所→ムトスぶらざ		男性→タクシー 女性→徒歩	
	8:15	8:45	30	大学生朝食（お弁当）※ムトスぶらざで配食		飯田市民館多目的ホール (ムトスぶらざ2階)	
		9:00		集合			
	9:00	10:20	80	5 飯田のシンボルとソーシャルキャピタル ・飯田のまちづくりの原点 りんご並木での市民活動の広がり ・みる・演じる・ささえる いいだ人形劇フェスタの市民運営 ・桑原さん、後藤さん、平岡教授による鼎談	登壇者①：りんご並木まちづくりネットワーク 桑原 利彦 氏 登壇者②：いいだ人形劇センター 後藤 渉 氏 コーディネーター：立命館大学 平岡 和久 教授		
	10:20	10:30	10	休憩			
	10:30	12:00	90	6 ヒアリング調査準備②	担当教員による指導		
	12:00	13:00	60	昼食（お弁当）、休憩			
				移動		タクシー	
					地縁型SCの事例 対象：千代しゃくなげの会 講師：千代しゃくなげの会理事長 関口 俊博 氏	千代公民館	
	13:00	16:30	210	7 グループ別事例調査 ※各事例2グループ ①活動団体からの説明+質疑（グループ合同） ②深掘り質問準備（グループ毎） ③深掘り質疑（グループ合同）	地縁型SCとテーマ型SCへの展開事例 対象：天竜川鶯流峡復活プロジェクトとNPO法人いなだに竹links 講師：NPO法人いなだに竹links代表 曾根原 宗夫 氏 竜丘地域自治会前会長 下平 勝熙 氏 元竜丘自治振興センター所長 市瀬 智章 氏	竜丘公民館	
					テーマ型SCの事例 対象：国際りんご・シードル振興会 講師：NPO法人国際りんご・シードル振興会 後藤 高一 氏 講師：りんご生産者 伊藤農園 伊藤 清人 氏	喜久水酒造（13:00～14:30） 伊藤農園（北方）（14:50～ 16:00）	
				移動		タクシー	
	16:30	17:30	60	8 調査とりまとめ	担当教員による指導		
	17:30	18:30	60	夕食（お弁当）、休憩		飯田市民館多目的ホール (ムトスぶらざ2階)	
18:30	20:00	90	9 報告準備①	担当教員による指導			
20:00	20:15	15	高校生帰宅 大学生は入浴へ移動		タクシー		
20:15	21:00	45	大学生入浴		砂払温泉		
21:00	21:15	15	大学生宿泊場所へ移動		タクシー		
			大学生宿泊：男性→域学連携交流施設さあくる 女性→りんご並木のエコハウス		域学連携交流施設さあくる りんご並木のエコハウス		
3日目 8月18日 金曜日	7:45	8:30	45	大学生朝食（パンと飲み物）※宿泊場所へ配食		域学連携交流施設さあくる りんご並木のエコハウス	
	8:30	9:00	30	大学生移動：宿泊場所→ムトスぶらざ		男性→タクシー 女性→徒歩	
		9:00		集合			
	9:00	12:00	180	10 報告準備②（グループ別）	担当教員による指導	飯田市民館多目的ホール (ムトスぶらざ2階)	
	12:00	13:00	60	昼食（お弁当）、休憩			
	13:00	15:00	120	11 グループ別報告会(1グループ20分程度)			
	15:00	15:10	10	休憩			
	15:10	16:10	60	12 総合討議	名城大学 福島 茂 教授		
16:10	16:40	30	高校生解散 大学生は農家民泊へ移動		タクシー		
16:40			13 大学生農家民泊	農家の皆さん	天龍峡PAで対面後、各農家へ		
4日目 8月19日 土曜日		9:00		集合		今田人形の館	
	9:00	10:00	60	14 南信州の着地型ツーリズムについて	講師：南信州観光公社代表取締役社長 高橋 充 氏		
	10:00	10:20	20	休憩			
	10:20	11:20	60	15 大学生体験アクティビティ 伝統人形芝居体験	今田人形保存会		
	11:20	11:30	10	総括・閉会			
	11:30	11:40	10	大学生移動		徒歩	
	11:40	12:40	60	16 体験アクティビティ 農業法人今田平りんご畑での焼肉昼食		農業法人今田平	
	12:40	13:10	30	大学生移動		タクシー	
	13:10		大学生解散		飯田駅前		

令和5年度 学輪IIDA共通カリキュラム ソーシャルキャピタルフィールドスタディ参加者名簿

■参加学生 28名 【大学生】：19名（2年生5名、3年生12名、4年生2名） 【高校生】：9名（1年生2名、2年生2名、3年生5名）

No.	学校名	学部・専攻	学年	氏名	性別	事例調査コース		宿泊場所	農家民泊先
1	東京都立大学	法学部	3年	市野瀬 弓響	男	A-1	千代しゃくなげの会	域学連携交流施設	太田 いく子
2	名城大学	都市情報学部	3年	岩田 千明	女	A-1	千代しゃくなげの会	エコハウス	柏木 ちづ子
3	名城大学	都市情報学部	3年	白井 あずさ	女	A-1	千代しゃくなげの会	エコハウス	柏木 ちづ子
4	飯田高校		高2	原 殊海	女	A-1	千代しゃくなげの会	-	-
5	名城大学	都市情報学部	3年	近藤 弘基	男	A-2	千代しゃくなげの会	域学連携交流施設	太田 いく子
6	名城大学	都市情報学部	3年	柳原 里菜	女	A-2	千代しゃくなげの会	エコハウス	岡島 ゆみ子
7	立命館大学	政策科学部	2年	吉中 ゆり	女	A-2	千代しゃくなげの会	エコハウス	岡島 ゆみ子
8	飯田高校		高2	水野 美樹	女	A-2	千代しゃくなげの会	-	-
9	飯田女子高校		高1	磯田 実花	女	A-2	千代しゃくなげの会	-	-
10	大阪商業大学	経済学部	4年	池田 慶太郎	男	B-1	天竜川鷺龍峡復活プロジェクト	域学連携交流施設	野田 充夫
11	東京都立大学	法学部	3年	川野 隼太	男	B-1	天竜川鷺龍峡復活プロジェクト	域学連携交流施設	杉山 豊
12	名城大学	都市情報学部	3年	安田 智哉	男	B-1	天竜川鷺龍峡復活プロジェクト	域学連携交流施設	野田 充夫
13	下伊那農業高校		高3	渡邊 志織	女	B-1	天竜川鷺龍峡復活プロジェクト	-	-
14	東京都立大学	法学部	3年	大山 倫輝	男	B-2	天竜川鷺龍峡復活プロジェクト	域学連携交流施設	野田 充夫
15	名城大学	都市情報学部	3年	安田 陽向子	女	B-2	天竜川鷺龍峡復活プロジェクト	エコハウス	岡島 ゆみ子
16	名城大学	都市情報学部	3年	山田 能毅	男	B-2	天竜川鷺龍峡復活プロジェクト	域学連携交流施設	佐伯 忍
17	立命館大学	政策科学部	2年	竹内 佑輝	男	B-2	天竜川鷺龍峡復活プロジェクト	域学連携交流施設	太田 いく子
18	飯田風越高校		高1	篠田 夢実	女	B-2	天竜川鷺龍峡復活プロジェクト	-	-
19	大阪商業大学	経済学部	4年	萬木 陸渡	男	C-1	国際りんごシードル振興会	域学連携交流施設	佐伯 忍
20	名城大学	都市情報学部	3年	永田 海斗	男	C-1	国際りんごシードル振興会	域学連携交流施設	佐伯 忍
21	立命館大学	政策科学部	2年	田中 葉音	女	C-1	国際りんごシードル振興会	エコハウス	柏木 ちづ子
22	飯田女子高校		高3	浅賀 留菜	女	C-1	国際りんごシードル振興会	-	-
23	飯田女子高校		高3	近藤 梓	女	C-1	国際りんごシードル振興会	-	-
24	名城大学	都市情報学部	3年	林 未玖仁	男	C-2	国際りんごシードル振興会	域学連携交流施設	杉山 豊
25	立命館大学	政策科学部	2年	木下 美音	女	C-2	国際りんごシードル振興会	エコハウス	柏木 ちづ子
26	立命館大学	政策科学部	2年	本多 貴登	男	C-2	国際りんごシードル振興会	域学連携交流施設	杉山 豊
27	飯田女子高校		高3	齋藤 愛可	女	C-2	国際りんごシードル振興会	-	-
28	飯田女子高校		高3	清水 陽色	女	C-2	国際りんごシードル振興会	-	-

■参加教員 5名

No.	所属等	氏名	性別	事例調査コース		
1	大阪商業大学経済学部 専任講師	藤井 至	男	C	国際りんごシードル振興会	
2	東京都立大学法学部 教授	大杉 覚	男	B	天竜川鷺龍峡復活プロジェクト	
3	東洋大学社会学部 教授	小林 正夫	男	A	千代しゃくなげの会	
4	名城大学都市情報学部 教授	福島 茂	男	B	天竜川鷺龍峡復活プロジェクト	
5	立命館大学政策科学部 教授	平岡 和久	男	A	千代しゃくなげの会	

■事務局 3名

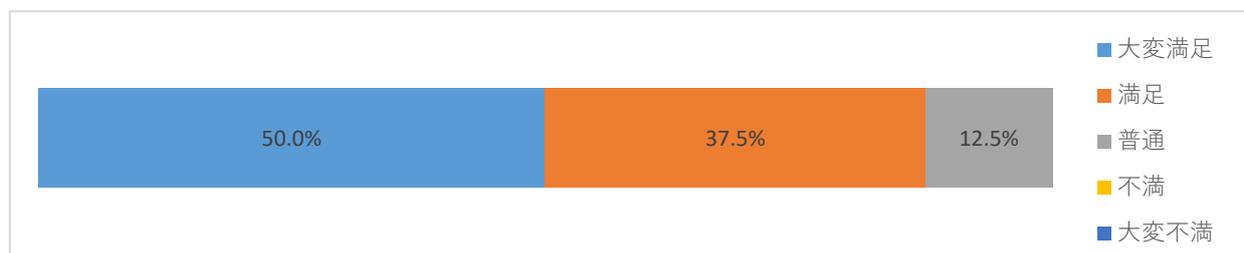
No.	所属等	氏名	性別	事例調査コース		
1	飯田市役所大学誘致連携推進室	加藤 博文	男	A	千代しゃくなげの会	
2	飯田市役所大学誘致連携推進室	下平 一博	男	B	天竜川鷺龍峡復活プロジェクト	
3	飯田市役所大学誘致連携推進室	小島 一人	男	C	国際りんごシードル振興会	

ソーシャルキャピタルフィールドスタディ アンケート結果

1 日程	8月16日(水)～19日(土) ※高校生は18日まで
2 参加者	大学生19名、高校生9名 大阪商業大学2名、東京都立大学3名、名城大学9名、立命館大学5名 飯田高校2名、飯田風越高校1名、下伊那農業高校1名、飯田女子高校5名
3 回答数	24件

-フィールドスタディの内容に関する項目-

1. 「事前学習」について



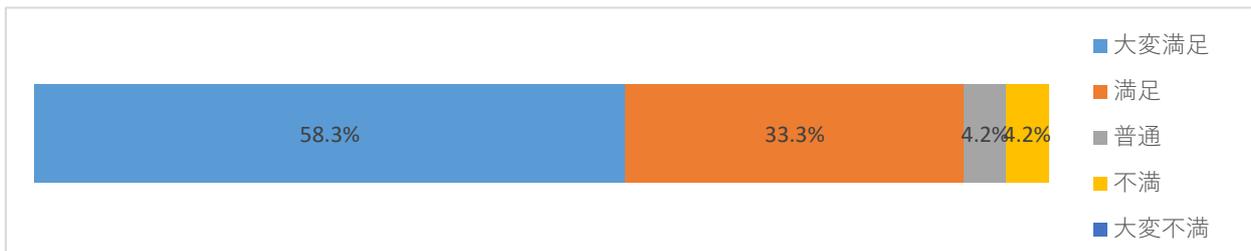
- ・ゼミの一環で参加したのですが、事前学習もしっかりおこなえていたと思います。福島先生に、ソーシャルキャピタルとは何なのか、現在の飯田市の状況や特徴などの知識を身につけることが出来ていたと思います。
- ・飯田市やフィールドスタディの概要についての説明が非常にわかりやすく、事例調査への流れをスムーズに行うことができた。
- ・ソーシャルキャピタルについて図解などを用いて解説していただいたので、理解度が深まりました。
- ・ソーシャルキャピタルについて理解した上で参加できたので、すんなりと事例調査に入れた。
- ・私にとっては普段関わりのない事だったので、導入としては分かりやすかった。
- ・ソーシャルキャピタルとは何かを事前に知ることによって初日から地域と人の繋がりのお話をソーシャルキャピタルと関連付けて聞いた。
- ・フィールドスタディへの意欲が高まりとても良かったと思います。
- ・無形のモノを想像で事前学習することは難しかった。
- ・飯田市の取り組みを知れたのは良かったが、もう少し詳しい情報があっても良いと感じた。
- ・(高校生) フィールドスタディに取り組む前に事前に知ることが出来てよかった。
- ・(高校生) 詳しく概要が知れてよかった。
- ・(高校生) ソーシャルキャピタルについての土台を作れた。
- ・(高校生) ソーシャルキャピタルが理解出来た。
- ・(高校生) 福島先生の講義がとてもわかりやすくて全くソーシャルキャピタルについて知らなかったのが少しわかるようになったことで、興味をもって三日間の活動に取り組みました。ただ、容量の問題で全ての動画のダウンロードができず、見れないものがあったので、ダウンロードしなくても見る事ができる形式にしてもらえるとありがたいと少し感じました。

2. 「地域自治と協働のまちづくり」講義について



- ・ 飯田市の住民と協働したまちづくりの概要がよく分かった。
- ・ 協働でまちをつくることの意味を知ることが出来たと感じる。
- ・ 具体的な市民活動などを挙げてくださり、理解を深めることができました。
- ・ 市役所の方のお話だったのでわかりやすく、実際のイメージが湧きました。
- ・ 全体的に分かりやすく説明していただいたと感じた。
- ・ これを聞いた上で街歩きができたのが良かった。
- ・ 飯田市が全国的に見ても公民館の数が多いや、「公民館する」といった言い回し等、如何に飯田市が地域に対して強いこだわりを持っているのかが理解出来た。
- ・ 飯田の公民館活動などの話が興味深かった。
- ・ 飯田市の特徴を捉え、その後のFSに活かせる内容でした。
- ・ 大切な情報の補完ができた。
- ・ 飯田市特有の住民性や、自治について学ぶことが出来ました。
- ・ 内容が難しかった。
- ・ (高校生) 飯田に住んでいるのに知らなかった事がたくさんあって飯田に対するイメージが少し変わりました。
- ・ (高校生) 飯田の知らないことをしれてとても良かった。
- ・ (高校生) まちのことを深く知れた。
- ・ (高校生) 人々のつながることは素敵だと思った。
- ・ (高校生) 当たり前なのがすごいことがわかった。

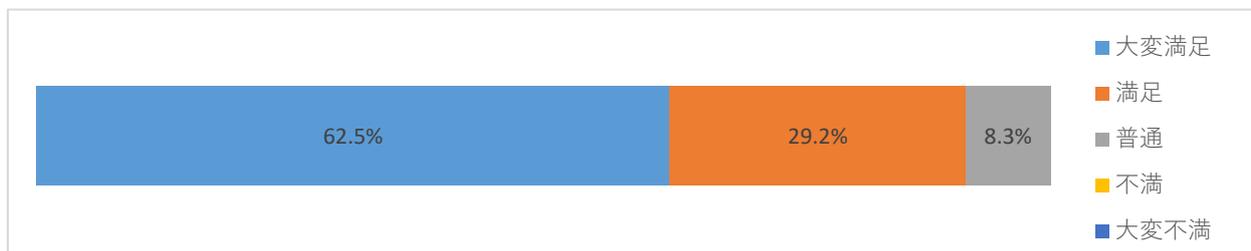
3. 「丘の上のまち歩き」について



- ・ 街中に様々な飯田の魅力があり歴史を通して飯田のことをよく知れた。楽しかった。
- ・ 飯田市の歴史やりんご栽培について知ることができて、学習意欲が高まった。
- ・ 飯田市の歴史的背景等の説明がわかりやすかった。
- ・ 実際に自分の足で歩いて、街の雰囲気を感じる事が出来ました。また詳しくお話を頂き、面白かったです。
- ・ 自分だけで歩くとスルーしそうなところまで解説していただけた。
- ・ インターネットで調べても整理出来ないような部分を詳しく教えていただきました。
- ・ 暑い中、一つ一つを説明してくださり、地元愛の強さを実感した。
- ・ お二方の地域愛を感じ、良い学びを得られる時間であった。
- ・ 生の声の大切さに気づいた。

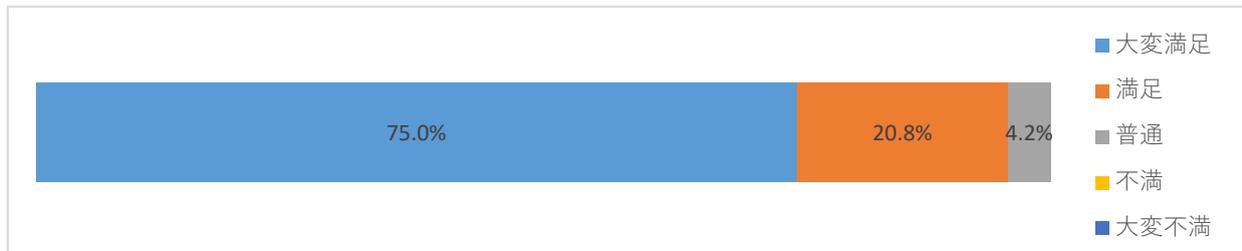
- ・気温が厳しかったですが、貴重なお話を聞くことができました。また他学生と交流もでき良かったです。
- ・実際に中心市街地のまちづくりに関わる方と歩くことでより地域性を理解する手立てになった。
- ・もう少しゆっくり見学出来たらよかったです。
- ・ためになる話だったが、外が非常に暑くて話に集中できなかった。
- ・真夏ということもあり2回に分けて行うなど1度に2時間は長かったと感じた。
- ・(高校生) 知らないこと知らない場所がたくさんあり、すごく驚きました。特に飯田の大火のこととりんご並木のこと、田中芳男の話に興味を持ちました。
- ・(高校生) 自分が行ったことのないところに行けてとても良かった。
- ・(高校生) 街を歩いて飯田のことをよく知れた。
- ・(高校生) 住んでいてもわからないことが知れて面白かった。
- ・(高校生) 地域の知らないことが知れて良かった。

4. 「飯田のソーシャルキャピタル&ワークショップ」について



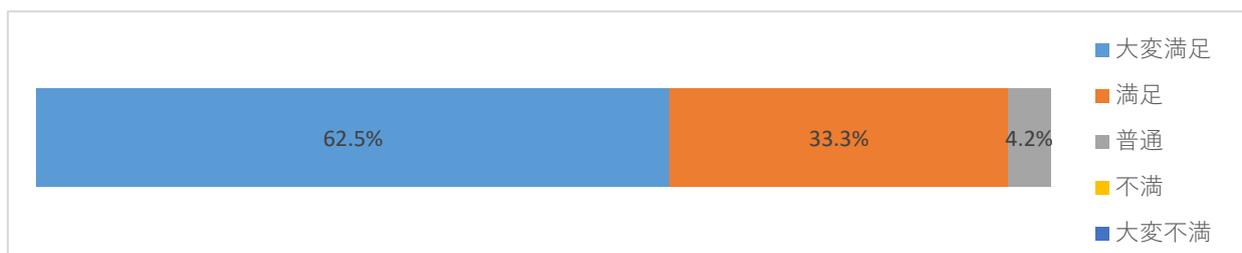
- ・ソーシャルキャピタルという複雑なものを一つずつ分かりやすく説明していただき、理解を深めることができたと感じている。
- ・言語化が難しいソーシャルキャピタルについて学ぶことができ、構造的に知ることができた。
- ・ソーシャルキャピタルの事前学習を行ったおかげで理解しながら話を聞けた。また、事例の特徴を理解出来た。
- ・事前学習や市役所の方のお話を聞いてさらにこの講義があったことでソーシャルキャピタルについてより一層理解が深まったと感じました。
- ・ソーシャルキャピタルについて復習しながら、飯田ではどういったことを実施しているのか、学ぶことが出来た。
- ・現地で実際に感じるとソーシャルキャピタルがどのようなものなのかが理解しやすかった。
- ・ワークショップで他大学の方との情報共有が行えた。
- ・グループワークにむけて、注目点をつかむことができました。
- ・時間の都合でWSが出来なかったことは少し残念でした。
- ・(高校生) 飯田市がソーシャルキャピタルに向いている地域だと知らなかったので知ることができてよかった。
- ・(高校生) ソーシャルキャピタルについてもう一度確認することで理解が深められて良かったです。ワークショップが出来なかった事が少し残念だったと感じました。
- ・(高校生) 地域の活動や飯田市の特徴が知れた。
- ・(高校生) 事前学習の復習が出来て良かった。
- ・(高校生) 知らないことを知れた。

5. 「事例調査の進め方と準備」について



- ・ あらかじめ班のメンバーとの交流を深め、目的を統一しておくことができた。
- ・ 調査の進め方、どこに注目して調べるのかを念頭に置きながら準備することが出来た。
- ・ その後グループワークを進めるにあたって役立ちました。
- ・ ヒアリング調査の内容を考えやすかった。
- ・ 何をすれば良いかを明確にしてくれ、ありがたいと感じた。
- ・ 体的な調査の進め方を知ることができて、今後も役立てようと思いました。
- ・ 短時間で学んだことや伝えたいことをまとめるのは難しかったです、今回で自分の言葉でまとめる力が着いたのではないかと思います。
- ・ 発表へ向けての大切な時間となった。
- ・ メンバーの意見も聞けてかなり参考になった。
- ・ グループ内でそれぞれ意見を出し合い、深堀質問まで、うまく作れたと考えます。
- ・ 高校生と一緒に質問を考え、理解を深めることが出来て新しい刺激も貰えてよかった。
- ・ (高校生) 初めて大学生のプレゼン準備をして新鮮だった。
- ・ (高校生) 今まで私がやってきた調査ではこんなに深く探ることはしてこなかったので、すごく勉強になりました。
- ・ (高校生) 大学生の皆さんにいろんなことを教えてもらえた。
- ・ (高校生) 次の日の準備をできて良かった。
- ・ (高校生) 説明が分かりやすかった。

6. 「飯田のシンボルとソーシャルキャピタル」鼎談について



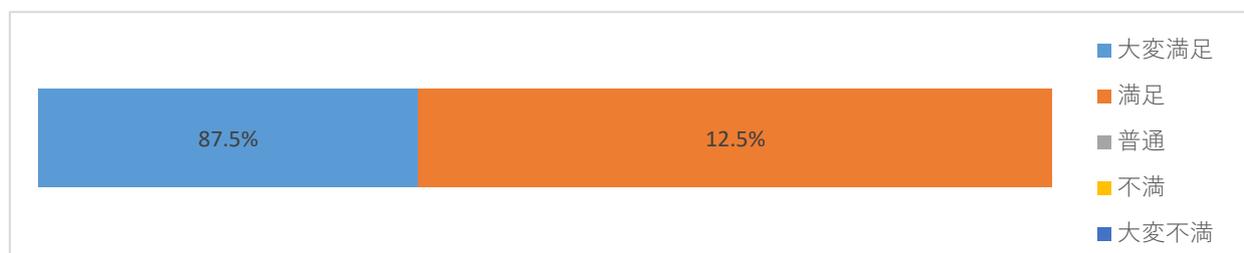
- ・ 実際に飯田市を盛り上げ、発信している当事者の方々のお話を聞くことができ、このまちや人との繋がりについて、直に聞くことができた。
- ・ 桑原さんの「市民に自分たちが何をしているのか知ってもらうことも重要」という考え方は、今後の地方自治研究についても非常に重要になると思った。
- ・ シンボルのりんごを通してどのような主体が生き生きと活動しているのかを知ることができた。余談ではあるが、中央自動車道にある飯田市のカントリーサインが何故あのデザインなのかをここで理解した。
- ・ 登壇者の方のお話がとても興味深く、人形劇を近くで見ることが出来て楽しかったです。
- ・ とても熱意を持って話していただき関心が高まった。また、人形劇を実際に見ることができとても面白かった。
- ・ とくに人形劇を実際に体験してとても楽しかった。文化に触れながら飯田の方の話聞いてとてもい

い機会であった。

- ・話を聞いて飯田のコミュニティの強さを感じることができた。
- ・りんご並木の歴史や、どのような取り組みをしてきたのか、どのような思いがあるのかなどを学ぶことが出来ました。
- ・活動に参加する方々の心持ちを聞くことができ、ためになりました。
- ・(高校生) 繋がりを大切にしていることがわかるし、また自らも積極的に人と関わり、街のために一生懸命で恰好良かった。
- ・(高校生) 飯田に住んでいると飲み会があるのも地域の行事や関わりが多いのも当たり前だと思っていて、少しめんどくさいなと思っていたけど、それが人とのつながりや信頼に繋がっていることを知れて、この文化を大切にしていきたいと感じました
- ・(高校生) 若者と大人が手を取り合う社会をめざしたい。
- ・(高校生) 人形劇を見せていただいたりして、とても良かった。
- ・(高校生) 聞いてて楽しかった。

7. コース別ヒアリング

【Aコース】地縁型 SC の事例 千代しゃくなげの会へのヒアリング調査



- ・短時間ではありましたが、貴重なお話を聞くことが出来ました。質問したことにも全て答えて下さり感謝しています。
- ・一部ソーシャルキャピタルから離れた質問をしてしまったことは申し訳無かったが、今後の自分の活動への決意と私たち若者の関係性の豊かな将来への義務を実感した。
- ・質問に丁寧に答えて頂き、資料には書いてないリアルの部分を知ることができた。
- ・実際に施設を訪問することができ、有意義な時間を過ごすことができました。
- ・生の声によってしゃくなげの会の全貌が見えた。
- ・用意した質問を聞いてよかった。
- ・(高校生) 丁寧に質問に答えていただき、細かいことまで知る事ができてよかったです。
- ・(高校生) 地域理念を持っていてそれに基づいて地域の彼から決めていて素敵だと思った。

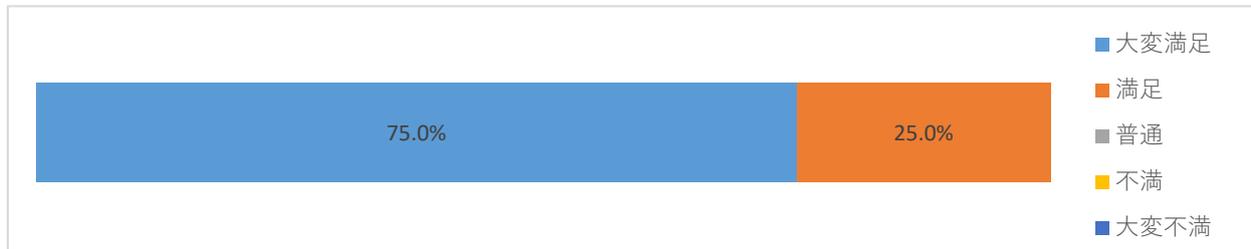
【Bコース】地縁型 SC とテーマ型 SC への展開事例 天竜川鷺流峡復活プロジェクトと NPO 法人いなだに竹 links へのヒアリング調査



- ・活動の内容がよく分かり、事業者や自治体などさまざまな面からの意見を聞くこともできた。当事者意識の高さを知ることができ、有意義な時間となった。
- ・お話を聞いて初めて具体的なイメージが湧いたのでとても良かったです。

- ・3者間の連携や、それぞれの考え方などを知ることができました。
- ・曾根原さんの行動力や市民の団結力に心を打たれた。
- ・曾根原さんの人柄が要因を引きつけたことに驚いた。
- ・殆ど曾根原さん一色に思えるほど、インパクトの強い方でした。
- ・曾根原さんのお話が非常に上手で、話の内容が入りやすかった
- ・(高校生) 色々な視点から話が聞けた。

【Cコース】 テーマ型 SC の事例 国際りんご・シードル振興会へのヒアリング調査



- ・実際にシードル振興に向けて地域で活動されている方のお話を聞いてテーマ理解が深まりました。
- ・実際にソーシャルキャピタルに基づく事業の創立と展開を知ることができた。
- ・両サイド同じ考えではなく、それぞれの考えがあることに、でも取り組みができていていることは熱意があるからだとして強く認識できた。
- ・調べても出てこない内容をたくさん話していただけた。
- ・シードル作りにより積極的な(委託醸造なさっている)農家さんのお話であればより良かったです。
- ・少し時間に余裕がなかった。
- ・(高校生) 振興会を立ち上げた人、シードルへりんごを提供している人のお話を聞いてシードルに対する思いや歴史を知れてとても良かった。
- ・(高校生) シードルのことを初めて知れた。

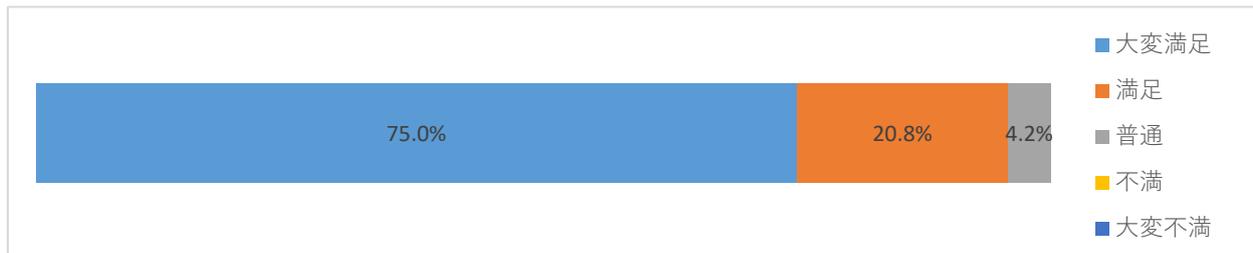
8. 「グループワーク」について



- ・それぞれが違った境遇のグループで話し合うという珍しい経験をする事ができ、計画通りに進めることもできた。
- ・学年も出身も異なるグループでしたが、みんなが協力し合っていました。短い時間でしたが、全員が飯田市について本気で考えようとしていたと思います。
- ・他大学の学生や飯田の高校生と話し合いをする機会自体がとても貴重なので良かった。
- ・違う学校の人たちと楽しく交流しながら学ぶことができた。
- ・事前交流もふくめ、交流が深まっていたので協力し合うことができた。
- ・意見交流ができ、仲も深まり非常に楽しかったです。
- ・みんなで考えを共有しながら進めることができ、自分もためになりました。
- ・高校生ともうまく連絡を取り合い、まとまった話し合いができたと考えます。
- ・積極的な高校生のふたりと協力的な大学生でみんなで話し合いをしながら満足するグループワーク進めることが出来た。

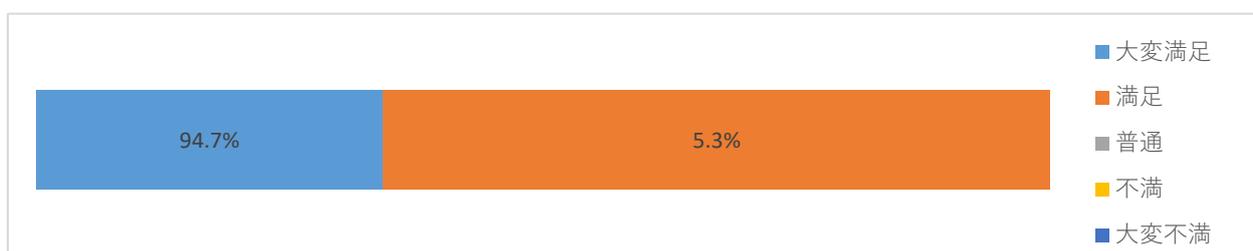
- ・飯田に実際に関わる高校生を含めることで若者・子どもからみた実際の「まち」を実感でき資料づくりがとても捗った。
- ・飯田の高校生と交流できたのがよかったです。
- ・(高校生) 大学生や高校生の先輩と話し合ったり考えたりする事で、考え方とか深掘りの仕方に驚き、自分の今までの調べ学習とかが表面的でしかなかったことに気付かされました。
- ・(高校生) 大学生の方々が意見を聞いてくださったりして意見を出しやすかった。
- ・(高校生) 大学生さんは私たちの知らないことを知っているので議論が深くなって面白かった。
- ・(高校生) 大学生の人達の思考の速さが凄かった。
- ・(高校生) 大学生たちと話し合っって調べられた。

9. 「成果報告会」について



- ・社会関係資本の王道は地縁型であると思っており、他の事例がどのように SC に繋がるのかを学ぶことができた。
- ・他の事例の発表を聞いて、多方面からソーシャルキャピタルを学ぶことができた。
- ・他の班も各事業についてフィールドスタディの観点から成功した要因を分析することができていた。
- ・多くの人の前で発表するのは緊張しましたが、準備してきたことが発揮できたと思います。ほかの班の発表からも学ぶことが多かったです。
- ・自分が参加していないコースについての話を聞くことができて、とても興味深かったです。
- ・実際に曾根原さんにも見て頂けたことが嬉しかったです。
- ・発表に対して地元の方達や沢山の先生方から意見を聞けたことがとてもよかったです。
- ・質問の返答に手間取ってしまい、自分の至らない部分を見ることができた。
- ・皆が自分と同じように考えていたことが印象に残った。
- ・緊張したがとても良い経験になった。
- ・(高校生) 人前で話す機会をあまり経験してこなかったもので、大学生と一緒に発表する機会がもらえてすごく勉強になりました。他の事例の発表を聞いたことも考えを深めたり、飯田について知る事ができたので良かったです。
- ・(高校生) どの班も深く考察してあって尊敬した。
- ・(高校生) とても緊張したが良い経験になった。
- ・(高校生) ほかの班の発表がおもしろかった。

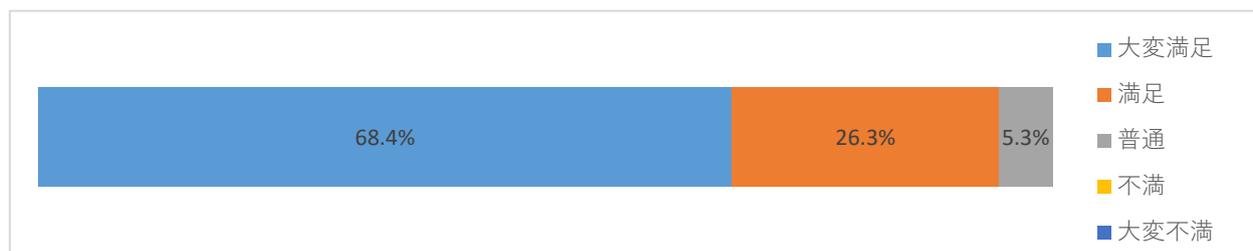
10. 農家民泊について



- ・自治に参加した際の経験談が面白く、ソーシャルキャピタルの観点からしても非常に参考になった。

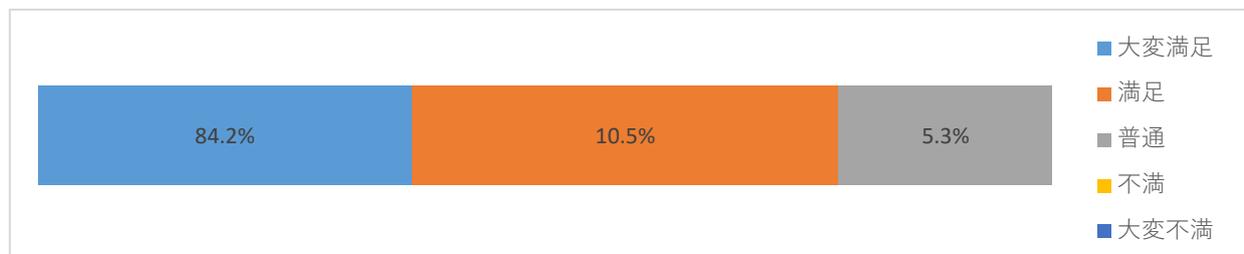
- ・より近い距離で、千夜の事を教えて下さり、また来てみたいと思えるようになりました。
- ・とても親切にしてくださいました。地元で取れた野菜や食材を使って全て手作りの料理を振舞ってくださいました。私が大好きな冬瓜がとても美味しく驚いたことを覚えています。
- ・農家さんがBBQを準備してくださったり、よこねたんぼにも早朝から連れてってくださって民泊ならではの経験だった。
- ・経営者の方からの視点で話を伺えた。相談にも乗ってもらいすごく勉強になった。
- ・本当に色々な話をした。飯田の話以外にもたくさん話が出来て美味しいご飯を食べれてとても楽しかった。
- ・民泊を続ける理由や、地域への関わり方などを知ることができました。
- ・五右衛門風呂など、経験したことないことを体験させていただけた。
- ・佐伯さんの知識量に圧倒され、また飯田という場所の美しさにも圧倒された。
- ・宿泊は千栄地区内であった。実際に千栄地区の住民として、今後の千代の姿についてお聞きでき、とても満足だった。
- ・杉山豊さんと深夜まで様々な話をすることができて、とても貴重な時間だった。
- ・食事もとても美味しく、ご夫婦に良くしていただいて楽しかったです。
- ・農家の方の多くの活動について知れて楽しく、学びになりました。
- ・かなり貴重な経験と美味しいご飯に感動した。
- ・色々なお話を聞けてとても楽しかった。

11. 「南信州の着地型ツーリズム」講義について



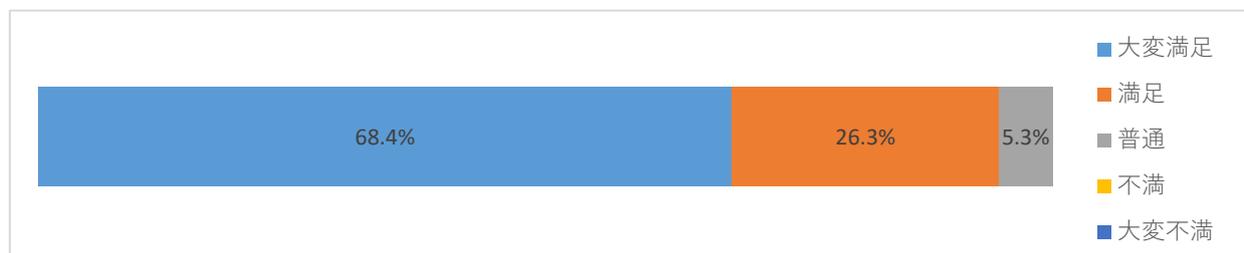
- ・このインターネット社会で、地域の魅力をより広く伝えるためにはどのようなことが必要であるのかを知ることができた。
- ・課題についてきちんと考え、コロナ明けからどんどんやっていくぞという前向きさが印象的でした。
- ・外国との交流など、南信州がこれまで様々な取り組みをしていることを学ぶことができた。
- ・観光業界に興味があったのでよいお話が聞けたと感じた。
- ・南信州地域の観光の発展の歴史を知れたので良かったです。
- ・観光公社の普段聞けない話を聞いて良かった。
- ・飯田の観光事業は私の事例ではあまり触れてなかったのでリアルな声聞けてよかった。
- ・飯田市が取り組む体験型観光について知ることができ、その一環として民泊に参加することができ、身になる体験であった。
- ・地域の特性を生かしたツーリズムの在り方がとても興味深かったです。
- ・講師の方の熱意のこもったお話が印象的でした。
- ・初めにやってみようと思う人がいることの大切さを学ばせてもらった。
- ・飯田市の美しい自然と、住民同士の素晴らしい関係性があるからこそその取り組みが多く、驚きました。

12. 「伝統人形芝居体験」について



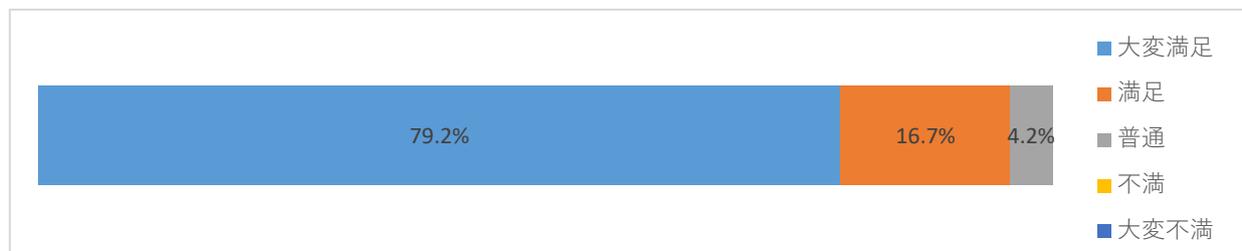
- ・実際に伝統文化に触れることで交流の促進だけではなく、双方の幸福感の増大にも繋がりとてよよいと感じた。
- ・人形劇はとても体力を使うものだ実感し、この文化を保持し続けている皆さんに敬意を持った。
- ・普段では見ることが出来ない伝統芸能で、貴重な体験でした。このような文化を大切にしてい、後世に繋げていく必要があると思いました。
- ・今後自分が年配になったときにあるかわからない伝統をこのような形で体験できて良かった。
- ・実際に体験出来て良かった。文化に触れて面白かった。
- ・人形劇がどのようなものかということと、その大変さ、面白さが実感できました。
- ・長い歴史のある人形劇を実際に体験ができる楽しかった。
- ・人形劇を体験させてもらえて、人形劇の面白さを知ることができた。
- ・人形を実際に触って体験するという貴重な経験が出来てとても楽しかったです。
- ・初めて体験したが難しく面白かった。
- ・実際に体験するとあんなに難しいものとは思いませんでした。
- ・人形劇は意外にも難しいことがわかった。

13. 「今田平りんご畑での焼肉交流会」について



- ・みんなでりんごに囲まれて焼肉をすることができて楽しかった。
- ・最後にみんなで楽しく焼肉を食べられたことが良い思い出になりました。
- ・美味しいお肉を沢山食べれて幸せでした。また天気も良かったため、きれいな景色の中みんなでパーベキューが出来て良い思い出になりました。
- ・最後に他大学の人たちとの交流ができてよかった。
- ・この場所が出来た経緯も聞くことができ、さらに地元の食材を頂ける良い交流にすることが出来た。
- ・とても楽しい時間を過ごせました。
- ・最後に全員で仲良くご飯が食べられたためよかったが、時間に制限があり少し勿体無さを感じた。
- ・焼肉もりんごジュース・シードルもおいしかった。
- ・りんごのシードルが美味しかったです。
- ・とても美味しく(暑かったですが)楽しめました。
- ・暑かったけどみんなでワイワイ楽しめた。
- ・焼肉は美味しかったが、非常に外が暑かった。

14. フィールドスタディ全体を通して



- ・この飯田の先進的なソーシャルキャピタルの考え方は、人口減少などに伴う低成長の時代を否定的に捉えるのではなく、地域社会を充実するためのもので、様々な主体によるバランスの取れた社会を築くために重要となるだろうと感じた。それを実際に体感することでより理解が深まるとともに、現在の様々な地域が持つ課題を多面的に捉える力がついたと感じた。
- ・フィールドスタディを通して座学では学べないリアルを見て感じる事が出来て本当に良かった。事例のことだけでなく文化や自然や歴史に触れられて良かった。
- ・活動全体を通して私の今後のゼミ研究や自治体への見方に影響を与えるほど良い機会であったと思う。
- ・参加する前はソーシャルキャピタルについて聞いたこともその意味も知らずにいたが、今回の体験を通してなんとなくその意味とあり方を知ることが出来た。
- ・ソーシャルキャピタルという考え方について、深く考えるいい機会となりました。
- ・私の地元や、大学のある地区とも、全く違う新しい地域のかたちを知るいい機会になりました。
- ・自分が知らなかったことだらけで、今後の人生においても役に立つような学びであったと感じました。
- ・大変な場面もありましたが、とても心に残る体験を沢山することができました。愛知県では見ることが出来ない自然に囲まれた景色も、脳裏に焼き付いています。また、飯田市でソーシャルキャピタルを学ぶことが出来て良かったと思います。
- ・いろんな人と話すいい機会だった。その中でも特に農家民泊の際の杉山豊さんとの語らいは有意義な時間だった。
- ・立命館の学生はもう一度研究のために訪問を行なったため、その理解を深める良い機会となった。
- ・名古屋には体感できなかったことが四日間に詰まっていた。
- ・飯田のソーシャルキャピタルを実感できた4日間でした。
- ・人生に一度あるかないかの貴重な経験が沢山あり学びになった。
- ・貴重な体験ができ、意見交流を経て知識や考えを深めることができました。
- ・学びの多い4日間で大変満足した。
- ・とても充実した4日間を過ごさせていただきました。有難うございました。
- ・楽しい四日間をありがとうございました。
- ・飯田市について勉強できる良い機会だったが、座学が多めであまり観光できなかった。
- ・(高校生)自分の中でソーシャルキャピタルの考えが深まったし、これから過疎化や少子高齢化が進む、地方の街づくりに大切な考えを学んだ。
- ・(高校生)自分がまだ知らない飯田について知れるいい機会になった。
- ・(高校生)参加しなければできない貴重な経験ができた。
- ・(高校生)地域の凄さが改めて分かった。
- ・(高校生)沢山の経験や学びが得られてとても充実した3日間でした。

-その他全体に関わる項目-

■この取組をより充実したものにするためには、どうしたらよいと思いますか？

【事前学習について】

- ・（高校生）事前学習の動画をダウンロードしなくても良い形式にした方が良くおもいます。

【参加者同士の交流機会について】

- ・（高校生）多くの学生に参加してもらい、たくさんの意見交換の場を設ける。
- ・（高校生）大学生と高校生がもっとお互いをしれるような機会を作る。

【学習の進め方について】

- ・事例ひとつでなくもう1つくらい深掘してみたい。
- ・シードルの班は事例調査のため2箇所訪れることになった、そのため時間に余裕がなく、質問が思うようにできない場面があった。よって、予定時間を見直すことで、スムーズに発表資料作りを行うことができると考えます。

【スケジュールについて】

- ・沢山の企画に参加させていただけたことがとても良かったと感じたのですが、何点か時間が短いように感じた企画があったので、もう少し時間を長く取っていただけるとより良くなるのではないかと思います。
- ・このフィールドスタディで関係させて頂いた方々は住民の中心の方ばかりであると感じた。また、地域をより知る手段として自分は旅行先などで、地元資本型の居酒屋に行くことが多く、そこでの会話などから自身の学びになることが多くある。より身近に地域を体感するためにも FS 中の夜などに自由な時間があることでより深い学びになるのでは無いかと感じた。
- ・質疑応答の際に、時間を押してしまうことがいくつかあったので、少し多めに時間を取る。
- ・休憩時間が少し短いと感じたので、もう少しゆとりを持った時間設定が欲しいとプログラム全体を通して感じました。

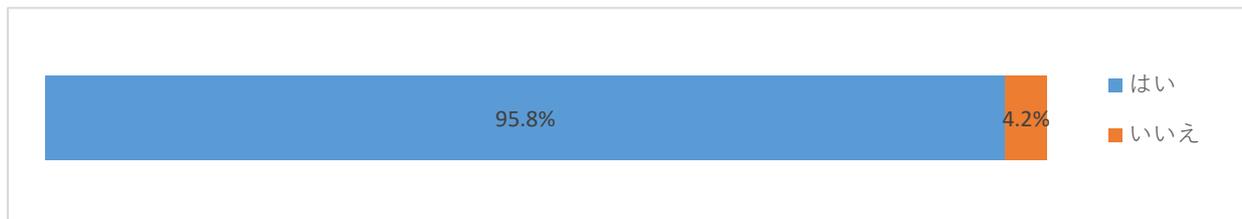
【事後の機会について】

- ・（高校生）別のテーマのフィールドスタディの成果発表も聞けるようなフィールドスタディ全体のまとめ会を開くとさらに多くのことを知れたり学びを深められるのではないかと思います。

【個々の参加者にできること】

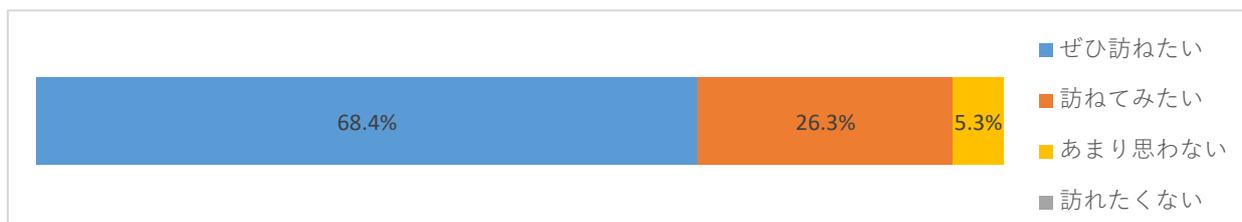
- ・今回のフィールドワークでは、主にソーシャルキャピタルに着目しながら、プレゼン作成やヒアリングに取り組んだことで、フィールドスタディー以前では漠然と、飯田市は自治、市民活動が発達しているというイメージであったところ、どういった社会構造や住民の心持ちが、活動を発達させてきたのかをかなり理解することができたと感じています。そのため今後他の地域の自治活動について研究したり、活動に参加する機会がある時には、その地域にどのような社会構造や価値観が存在しているのかを見ることで、ソーシャルキャピタルについてより深掘りしていくことが重要だと感じています。また特定の地域で研究を行うにあたっては、様々な立場の人の話を直接聞くことが重要だと感じたので、今後も全体を通してなるべく多くの地域の人と直接話をできる機会を設けることが重要だと感じました。
- ・お話を聞くだけでなく、自分で主体となって何か町おこしになるようなことを企画してその計画を進めていく中で、どんな地域の仕組みが必要で、またどんなシステムがその町にはあるのかと知ることができる。また知るだけでなく自分たちもそこに人たちにお世話になるのでそこでまた繋がりができると思います。
- ・飯田市が他の同じような地域と比べて自立的で素晴らしい活動をしていることを知り、広めていこうと努力することが大切だと考える。

■このような取組があれば、また参加したいと思いますか？



- ・大学の学びだけでなく多世代と関わって良かった。
- ・今回は非常に有意義で、楽しい時間を過ごすことができました、ありがとうございました。
- ・普段なかなかできない体験であるため、機会があればぜひ再び参加してみたいと思う。
- ・文化に対して色々な視点を作るきっかけになりました。

■今後また飯田を訪ねてみたいと思いましたが？



- ・飯田は元々好きでよく訪れていました。天龍峡だけでなく遠山郷、南信州地域では平谷村や天龍村、豊丘村、大鹿村などもよく訪れています。この飯田を含めた南信州をより好きになったとともに、学んだことを生かし、SCからの視点で今後は見ていきたいと感じました。
- ・人となりも良く、とても勉強になる場所だと感じました。
- ・今回の体験でまちの見方が少し変わり、その起点となった飯田には今後機会があれば訪れて見たいと思う。
- ・飯田市にはまだまだ多くの市民活動があるので、今回とは違う分野のものについて調べてみたいです。
- ・飯田市の自治の特徴を知ることができたので、我々独自の研究にも活かしたいです。
- ・今回のFSにおける様々なサポートありがとうございました。おかげでスムーズに色々なことを学べたと感じております。これからも活動を続けることですが、私も飯田という地域の魅力を教えていただいたので、友達に広めたり、ネットに魅力を伝えたりすることで少しでも飯田を盛り上げる欠片にでもなれたら良いなと考えております。これからも活動頑張ってください。応援しております。
- ・この度は参加させていただきありがとうございました。ソーシャルキャピタルの論文等で読むだけではわからないところも話を聞くことで実感できました。皆さんが様々なことに挑戦されていて、そこで知り合い、仲間になることが多いのかなと感じました。また、飯田市の魅力がよく理解できたので、また農家民泊など利用したいと思いました。
- ・時間を作ってじっくり回りたい。農家民泊をしてくださった農家の方にもまたお礼をしたい。
- ・今回は飯田の魅力はわかったものの、観光することが出来たわけではないので、いつか訪れてみたいと思った。
- ・今度は観光という形で、フィールドスタディの時とは違う飯田市の一面をぜひ家族や友達と訪れて見たいと思いました。
- ・また機会があれば、飯田を訪れたいと思った。
- ・ドライブなどで訪ねてみたいと思っています。
- ・天龍川の川下りをしたい。
- ・とても良い機会となりました。ありがとうございました。
- ・飯田市を学べる良い機会だと思ったが、3泊4日は少し長いと思った。

ソーシャルキャピタルフィールドスタディ振り返りレポート

No.	班	学校名	氏名	ページ
1	A-1	東京都立大学	市野瀬 弓響	18
2	A-1	名城大学	岩田 千明	20
3	A-1	名城大学	白井 あずさ	21
4	A-1	飯田高校	原 殊海	23
5	A-2	名城大学	近藤 弘基	24
6	A-2	名城大学	柳原 里菜	26
7	A-2	立命館大学	吉中 ゆり	28
8	A-2	飯田高校	水野 美樹	29
9	A-2	飯田女子高校	磯田 実花	30
10	B-1	大阪商業大学	池田 慶太郎	31
11	B-1	東京都立大学	川野 隼太	33
12	B-1	名城大学	安田 智哉	34
13	B-1	下伊那農業高校	渡邊 志織	36
14	B-2	東京都立大学	大山 倫輝	37
15	B-2	名城大学	安田 陽向子	38
16	B-2	名城大学	山田 能毅	40
17	B-2	立命館大学	竹内 佑輝	41
18	B-2	飯田風越高校	篠田 夢実	42
19	C-1	大阪商業大学	萬木 陸渡	43
20	C-1	名城大学	永田 海斗	44
21	C-1	立命館大学	田中 葉音	45
22	C-1	飯田女子高校	浅賀 留菜	46
23	C-1	飯田女子高校	近藤 梓	47
24	C-2	名城大学	林 未玖仁	49
25	C-2	立命館大学	木下 美音	50
26	C-2	立命館大学	本多 貴登	51
27	C-2	飯田女子高校	齋藤 愛可	53
28	C-2	飯田女子高校	清水 陽色	54

1. はじめに

今回私たちは飯田市における市民活動について、「千代しゃくなげ会」と「天竜川鷺流峡復活プロジェクト NPO 法人いなだに竹 Links」、「国際りんごシードル会」の3つについて6つの班に分かれてそれぞれがソーシャルキャピタルにどのように関係しているかを調べた。それぞれがソーシャルキャピタルと密接に関係し、飯田を守り、発展させていこうとする素晴らしい活動ばかりであったが、その中で私たち A-1 は「千代しゃくなげ会」について調べたので、それとソーシャルキャピタルとの関連性について述べていく。

2. 千代しゃくなげ会

千代しゃくなげ会は少子高齢化と人口減少が進む中山間地域である千代と千栄の両保育園の統廃合を市より提案されたのがきっかけである。保育園がなくなってしまうと子育て世帯が住まなくなり、過疎化が進んでしまうため、地域自ら社会福祉法人を立ち上げ、またその基本財産 1000 万円を子供のいる世帯だけでなく地域すべての世帯や篤志寄付によって集めた。また、これにとどまらず高齢者向けデイサービスセンター「しゃくなげの郷」を、一般廃棄物最終処分場建設を受け入れるかわりに開業した。

「千代しゃくなげ会」は「地域の子供とお年寄り地域で育て地域の手で守る」という基本理念を掲げ、それを忠実にこなしていることがわかったが、これと飯田の地域づくりの合言葉である「ムトスの精神」と「結」の精神が千代地区の地域性やソーシャルキャピタルに大きな影響を与えている。これらにより地域の人が地域の問題を自分たちの問題と捉えてソーシャルキャピタルを形成し、千代しゃくなげ会という社会的果実を地域全体の力で実らせることに成功した。人と人とのつながりを大切にするこの活動は結束型のソーシャルキャピタルの良い例だと言える。また保育園にもいてもデイサービスにおいても外部や内部からの評価は高く、前者は未満児の受け入れが多いといった、共働き世帯が多い現在の社会状況にも応える活躍もうかがえる。

3. 他の事例との比較

上記にもあるように今回は3つの事例をそれぞれの班で調べ、報告したが、千代しゃくなげ会を他の2つの事例と比較して考えたことは、千代しゃくなげ会は結束型の面が色濃く出ているということである。それがよく現れているものの一つに、「地域の子供とお年寄り地域で育て地域の手で守る」という基本理念である。地域の人一人ひとりが地域の問題は自分たちの問題であると認識しているのである。また、千代しゃくなげ会の理事長関口氏の「千代の子供が松尾に行ってしまう」という言葉からも汲み取れる。他の2つよりもより地縁的性質が見て取れるのである。これ一つでソーシャルキャピタルが完成しているという訳では無いが、ソーシャルキャピタルのための土壌がかなり豊かであると言える。自分の地域を発展させていくことは非常に重要であることが国際りんごシードル会の事例からよく分かるが、ここでは地域を「守る」ことの大切さ、そして難しさというものをよく学ばせていただいた。

4. まとめ

自分の地域を守るという目的から地域の人々によって作られた千代しゃくなげ会は千代や千栄にふんだんに盛り込まれたソーシャルキャピタルのための土壌のおかげで今でも地域の子供やお

年寄りを守る大切な社会福祉法人であるが、地域自体は少子高齢化や過疎化が進んでいるのが現状である。また地縁的特徴が強い地域では「よそ者の排除」が懸念されるが、関口氏は「是非子育てに来ていただきたい」と仰っており、実際に未満児を他の地域から預けに来る保護者もいるという。地域を守るために社会問題にも進んで立ち向かう彼らには上記の基本理念が染み付いており、千代しゃくなげ会の今後にも非常に期待していきたい。

今回のソーシャル・キャピタル（社会的関係資本）フィールドスタディでは、私は「千代しゃくなげの会」について事例調査しました。少子化の中で保育園の統合と民営化による2つの保育園の存続という選択において、「地域のこどもとお年寄り地域で守り、育てる」という基本理念のもと民営化による存続が決定しました。民営化を実現させるには、1千万円の基本財産が必要でした。1戸1万円の寄付を地域住民から約600万円、千代地区から離れた人たちが構成されているふるさと千代会などから篤志寄付約450万円が集まりました。自治会（現：まちづくり委員会）や行政も協力して住民への細やかな説明を行い、多くの人達を巻き込んでネットワークを広げていくことで住民が当事者意識を持ち、地域全体の問題として取り組むことができました。このような市民活動の背景には千代地区の昔から築き上げてきた社会的信頼と互酬性の規範があるからこそだと思います。また、まちづくり委員会や行政、住民がそれぞれの役割で問題解決へ取り組むまち全体での社会的仕組みができているところが市民活動の成立に関係していると感じました。住民が積極的に協力する理由として千代しゃくなげ会の基本理念や飯田のまちづくりの精神である「自分ができることからやってみる」という自発的な意思や意欲、具体的な行動を表す飯田の地域づくりの合言葉である「ムトス」の精神とお互いに支え合い、何かやるときは一緒になって取り組むという「結」の精神が住民の意識の中に根付いており、ソーシャル・キャピタルに大きな影響を与えていると思いました。

他の事例の話聞き、千代しゃくなげ会との共通点として、住民同士の交流が深いことが考えられます。天竜川の事例では行政と一緒にプログラムを発足し、企業、行政、地域が協力してそれぞれの立場でできることをすることによって成功へとつながりました。シードルの事例では始めはシードルに対してそれぞれ違う目的をもった人たちが集まりましたが、もともと築かれてきた生産者同士の関係性や声を掛け合っ人が集まるというような巻き込まれやすいと言うネットワークのおかげで多くの話し合いが行われ合意形成をすることができました。住民の中に当たり前に浸透し、築かれているコミュニティの結びつきや人間関係の温かさによってそれぞれの事例は成立していると感じました。さらに、他の2つの事例から「自分たちが楽しんでやること」が大切であるということ学ぶことができました。まずは自分たちが楽しくやることができなければ周りも楽しむことはできない。楽しくなければ他の人達も興味を持たず巻き込むことはできないという考え方を持った人達が中心メンバーとしていることで多くの人達も楽しく取り組むことができ、協力してくれる人も増えてプロジェクトがより良いものになっていると思いました。このような3つの事例から、住民が当事者意識を持ち問題へ取り組むこと、行政などが支援することによって規模が徐々に広がり、様々な人達を巻き込んでネットワークが広がっていくこと。このような基盤ができているところが飯田市の強みだと思います。また、地域に当たり前のように根付いた住民同士の交流やコミュニティの強さが飯田市の魅力だと今回のフィールドスタディから学ぶことができました。

これからさらなる発展をしていくためには今後も住民が問題に対してムトスの精神や当事者意識を持ち続けること、住民の活動に対して行政も携わり支援すること、このように恵まれた社会的土壌を持つ飯田がこれからもソーシャル・キャピタルを大切に今後活動していくことが重要だと考えます。

私たちは、フィールドスタディを通してしゃくなげ会設立の背景や設立までの経緯、どのように展開させていったのかなどについて調べたり、現在のしゃくなげ会の会長の関口さんにお話を伺ったりして調査しました。調査を進めていく中で、千代地区の住民性や地域に根付く社会的仕組み、ネットワークの強さを肌で感じました。

千代地区は飯田市の中心から15キロメートル離れた山間部で自然がとてもきれいな場所ですが、近年子供の減少が問題になっています。園児数の減少のため千代保育園と千栄分園を統合するか、民営化して住民自身で運営していくかという二つの選択肢が与えられました。千代地区は後者を選び、自ら運営するためにしゃくなげ会を設立しました。しゃくなげ会は、保育園を民営化するにあたって資金を集める必要がありました。そこで、地域住民としゃくなげ会は何度も話し合いを行い、一戸一万円ずつを寄付してもらうことを決定しました。結果1000万円の資金を調達することに成功したそうです。住民自らが運営を行ったり、資金を調達したりをすることは簡単なことではなく、強い意志と千代地区への愛着が住民を刺激しモチベーションを高めているのだと感じました。そしてそんな千代地区だからこそ掲げられている「地域の子供とお年寄り地域で育て地域の手で守り、育てる」という基本理念がより、住民の意識を向上させているのだと思います。もともと根付いている考え方だけではなく、自分たちの地域のことを大切にしていることが伝わってきました。

飯田市には様々なコミュニティが形成されています。まちづくり委員会や自治会、公民館などの社会的仕組み、近所付き合いや地域の集まりなどの住民同士のつながりなどです。世代を超えたコミュニティにより、住民同士で影響を与え合って周囲を巻き込むことでネットワークが社会全体に伸びています。住民と自治体の連携や住民同士の良好な関係から生まれる交流によって、その強いネットワークが生かされていることに気づきました。これらによって、ほかの地域ではできないことも可能にしています。飯田市ならではの住民と地域の関係の深さが、強みとなっていることがわかりました。

千代地区のしゃくなげ会だけではなく、天竜川鷲龍峡復活プロジェクトや国際りんごシールドル振興会について調べたグループの発表や農家民泊を通して、地元である飯田市が大好きでその気持ちを共有しあっていることが素晴らしいことだと思いました。日常的な会話で合意形成がされていて、地域と行政、企業をつなげていることを知りました。私が調査した千代しゃくなげ会では、自治会という社会的仕組みやネットワークの豊かさと、互酬性の規範などの地域自治の精神がソーシャルキャピタルを形成していました。しかし他の事例では、地域の課題解決によって生まれる共通の目標や、ビジョンによって生まれる身近な支援者の存在によりネットワークを通して活動の輪が広がることによって、高い認知度を獲得し活動を支えていることがわかりました。このように様々な要因が影響しあって飯田市の社会的な土壌を構成しています。

もともと飯田市に根付いている土壌があるからこそ持続性にもつながっているんだと思います。これらの活動で、0から1を生み出すことも難しいですが、継続させていくことも同じくらい難しいと思います。安定した運営やより多くの人に知ってもらうこと、人口減少に対しての対策などを行い、一時的なもので終わらないようにすることが今後の課題です。

飯田市でのフィールドワークを通して、地域住民の飯田市に対する想いや愛着の強さを感じました。それが大きな原動力になっていて、素晴らしい環境を生み出し続けているのだと思います。インターネットの普及や、多様なライフスタイルにより、人と人とのつながりが少なくなっていく現代ですが、今後も飯田市のこのような環境を守り受け継いでいくことが大切だと思いました。

感想

この応募を見た時、私は最初、部活と日にちが重なるため参加する気はありませんでした。しかし、友達に誘われて興味本位で応募してみました。はじめは、ソーシャルキャピタルについての知識は教科書で文字をみた程度しか知りませんでした。しかし、事前学習やフィールドスタディを通して考えを深めることができました。

私は、千代しゃくなげ会についてお話をお聞きしました。そこでは、「自分たちの村のお年寄りや子どもは自分たちの手で守り育てる」という理念をもとに行動していました。それを聞いて、先ず地域独自の行動理念があることや、その行動理念に誇りを持っていることが素敵だと感じました。世の中の少子高齢化が進む中でその流れにただ流されるのではなく、少しでもその町を存続させたいという想いが伝わりました。その話を聞く中で、私の村にも同じような声があるのを思い出しました。私の村も少子高齢化で子供の数は減っているのですが、小学校や保育園は統合されずに5つの小学校と6つの保育園が残っています。それは地域の人々の「子どもたちの声がなくなってしまうのが寂しい」という思いが反映されてのことでした。どこの村にも自分の住むところを想う人がいるのだと実感しました。

ソーシャルキャピタルについてははじめは難しく考えていましたが、説明を受ける中で何かをしようとするときにどんなシステムや繋がりがあると物事が進みやすいかと言う考えが、ソーシャルキャピタルの概念の一つだと知って、私の地域にはどのようなものがあるか考えてみました。私の祖母はいろいろな会に参加しています。その中の1つに「おたっしゃかい」と言うものがあります。それは祖母世代のお年寄りが集まり、クイズを出したり、一緒にお茶をするような地域の人の団らん場です。その会で出会う人は別の会でも一緒になることがあるので、「おたっしゃ会」は一つの情報共有の場となっています。そこで顔を合わせることで、そこでの縁で他の会にも誘いやすくなったり、参加しやすくなります。何より、地域の人々とのつながりが広がります。きっと祖母たちにとっては楽しく会話ができる場所という認識かもしれませんが、見方を変えれば、それは紛れもなくソーシャルキャピタルの一つであると思います。私が知らないだけで私の住んでいる街にはたくさんのソーシャルキャピタルがあるのだと気づきました。当人たちも知らないうちに豊かなソーシャルキャピタルが蓄積されている私の村が素敵だと思いました。

ソーシャルキャピタルはいつも人のつながりの中で生まれます。都会で暮らしたことのある母によると、都会では隣に住んでいる人の顔や名前を知らないということがあるようです。それでは、地域の人への信頼や互酬性が得られるとは思えません。都会はつながりが薄いと断言することはできませんが、地方の地域の方がそこから得られるソーシャルキャピタルは豊富だということがわかりました。

今回のフィールド・スタディーで学んでいたのは別の村や町のことでした。しかし、それを自分の村に重ねてみることで自分の村のこともより深く知ることができました。それと同時に千代のような問題は人ごとではないのだということも感じます。これから、この村で住んでいく中で千代のような問題に直面した時、今回の経験は未来に生きる学習だと思いました。

「ひと」が「地域」をつくり、「まち」をそだてる。

A-2 班 名城大学3年 近藤 弘基

1. はじめに

この南信州フィールドスタディは、現在自分が関わっている商店街の活性化において、なぜ商店街組合を中心とし、まちの人と人がつながっている、つながる必要があるのか、なぜ自分がこの活動を面白いと思っているのかを考えるいい機会であったと感じている。また、飯田にはよくドライブに行っており、そこで何かしらの「暖かみ」を感じていたがその理由を理解するまでに至っていなかった。フィールドスタディを通し、ソーシャルキャピタルを学ぶことで、今後の自身の活動の軸をよりしっかりとしたものにする気になるとともに、飯田をより好きになったと感じた。

このカリキュラムに関係された方々に心から感謝を申し上げたい。

2. フィールドスタディを通し実感、理解したこと

まず、この飯田を中心とした南信州でなぜソーシャルキャピタルが醸成されていったのかを自己理解を含めて述べたい。

ソーシャルキャピタルを考える上で基礎となる事柄として、飯田の語源ともなっている「結いの田」の考え方があるだろう。田んぼを通して暮らしを支えあい、人と人をつなぐ意味であるそうだが、これは飯田の地理的特徴が大きな要因となっていると考えられる。標高の高い山々に囲まれていることで外部との関わりは必然的に減少する。また、盆地上にも多くの河岸段丘が存在することで住みにくくなり、生活上の工夫が必要となってくる。飯田の厳しい環境で生活していくため、住民同士での「学び」の機会が定着化し、それは地域問題に対する情報共有・相互理解の場に発展していったのではないだろうか。これらによって「結いの精神」という地域性が生まれ、ソーシャルキャピタルが醸成されていったと考えた。

戦後には社会教育施設としての公民館の設置がされ、飯田でも住民主体の活動が行われた。全国の多くの公民館では地域住民と国家をはじめとした様々な権力とのぶつかりが起こり、対立が起こることも多い。公民館自体が減少傾向にあるほどである。しかし、この飯田では公民館主事を行政職員から教育委員会への出向として勤めているそうで、市民をはじめ多くの主体によって公民館活動は維持されている。職員自身も市民として公民館活動に携わっていることもあるだろう。これは職員と市民の対等な関係での「協働」が上手くいく要因ともなっていると思われる。また、中山間地域ということもあり、行政としても財政的余裕があるわけではない。住民から率先して行う飯田特有の「ムトス」の精神はこのような様々な要因が育てたものではないだろうか。

このフィールドスタディで最も印象に残ったこととして、千代しゃくなげの会の理事長、関口氏への質問とその答えがある。千代の事例を大都市圏で適用できるかを問うと「無理だろう」という回答が得られた。理由として都市圏での生活や価値観の違いを挙げていた。近隣・地縁関係が希薄な都市部において千代の事例は適用することは難しいそうだ。この飯田の中心市街地でも地縁組織は千代地区ほど強いものにするにはできなかったのだろうと感じた。また、新しいまちづくりに対する課題は市内のそれぞれの地区だけで解決することは難しい。そのような複雑化した新しい地域課題を解決するため、公民館活動に加えて、NPOなどの活動が活発化した。市民が主体となり、行政はその支援をするというスタイルは公民館活動から変化していないように感じる。

これは地域の垣根を超えた課題解決・地域活性化に対しても有効な手段であるだろう。いまだに竹 links や国際りんごシードル振興会はその例ではないだろうか。

どの事例も住民同士の共通課題や共通認識から生まれたものであり、住民は主体性を持って事例に関わっている。事例の当事者となることで地域への愛情の醸成にもつながり、世代を超えた良い循環が生まれると感じている。

3. おわりに

この南信州で学んだソーシャルキャピタルのあり方や関係性の豊かな社会のあり方は、今後の人口減少が激しい日本で大切なものになっていくのではないだろうか。人口減少に加え、日本では自然災害も多く発生している。災害発生時の救助や生活再建などを見聞きすると、関係性の豊かな社会の実現は非常に重要であると感じる。しかし、災害発生後にいきなり社会の関係性を豊かにすることはできない。

普段から社会的土壌のより良い在り方を模索する必要があるとともに、この飯田で学んだ私たちが大切に考えていかなければならない事柄であると思った。

私はフィールドスタディを通して飯田市の住民一人一人がムトスの精神を持っていることを実感した。私が調査した事例の千代しゃくなげの会は地域で進む少子高齢化に対し共通の問題意識を持ち、地域の子供とお年寄り地域の手で守り育てるという基本理念のもと千代地区の人々が中心となり始めた。

千代しゃくなげの会の事例からソーシャルキャピタルを2つの面から理解した。

1つ目は、社会福祉法人として千代しゃくなげの会を設立するにあたり基本財産の1千万円の調達が必要とされたことである。法人設立のため1戸1万円の寄付で600万円と篤志寄付138件から約450万円の資金収集し、基本財産1千万円が達成された。地域に子育て世代でない世代が多くいる中で千代地区の保育園の必要性を共通認識し、1戸1万円の寄付を集めるのは難しいと私は考えた。しかし、600万円の資金を住民から収集できたという事実からもわかるように住民が住民自治に対しての経験値とコミュニティを守るという当事者意識を持ち、住民同士の信頼関係があるからこそ法人設立を実現できたといえる。

2つ目は、保育園運営だけでなくデイサービスセンター運営と事業を拡大させ、保育園児と高齢者の包括的な交流機会を増やし地域の繋がりを作っているということだ。園児が田植え体験や千代の豊かな自然を感じながら過ごすこと、地元の食事を使用した給食を通して地域の多世代間の互いの交流を行う中で保育の質の向上している。実際に園の職員、保護者、園児の保育園の満足度は高い。このことから千代地区には多世代間からなる強いつながりのネットワークと互酬性が存在しており、園児の学びの文化を形成しているといえる。

このことから私は、千代地区の住民は資金調達の面からもわかるように地区の人々同士の自治会という協力体制が存在し、それは社会的な仕組みである「構造的なソーシャルキャピタル」であるといえる。また、千代のことは自分たちで何とかしようという当事者意識からわかるように千代地域の独特の価値観である「認知的なソーシャルキャピタル」があり、この2つのソーシャルキャピタルから千代地区の社会的土壌ができています。この2つのソーシャルキャピタルが寄与し互酬性集団行動という形で千代しゃくなげの会が設立し、千代地区におけるソーシャルキャピタルの構造であると考えた。

他事例と比較し共通点としてすべての事例に、人と人との信頼関係からソーシャルキャピタルが構成されていることがわかった。事例に参加している人たちなどの話から飯田に誇りと愛着を持っていることが伝わった。

千代しゃくなげの会と他事例の相違点は、テーマ型と地縁型のタイプの違いから分かるように、観光や産業振興といった対外的なつながりや帰属意識を超えたつながりが他事例の2つにあると感じた。

また、私は民泊したお宅で様々な話をしている中で印象に残ったのは、公民館の役割が私たちの住む地域とは違う利用方法であると話した際に「これが飯田の当たり前だから公民館の活用スタイルが特別であるという意識したことはない」といわれたことだ。私は私の住む地域とは違ってなぜ飯田の人々は地域住民同士が当事者意識を持ち自治に参加しているか、どのような経緯やきっかけでこの基盤ができていのか不思議であった。しかし、飯田の人々の「当たり前」の生活が受け継がれているだけで、飯田の人々は地域に愛着や誇りを強く持っており、地域を大切にしたいという思いから当事者意識を無意識のうちに持っていることがわかった。

飯田フィールドスタディを通して飯田市民の方の話を聞き、事例調査を通して飯田の地域社会に根付くソーシャルキャピタルを理解し実感できた。

私が参加した活動である千代しゃくなげの会が創設された経緯としては平成15年度から千代地区に2つある保育所のうち、千栄保育園の園児数が2年連続で10人未満となり、国や県から補助金が打ち出されることが決定し、市当局からは「千栄保育園を廃園し、千代保育園に統合する」案と「存続するなら千代保育園を民営化し、その分園とする」案が提示された。6か月に及ぶ自治会や保護者との会合の末、1戸1万円の寄付と篤志寄付により基本財産1千万円を調達した。そして社会福祉法人を設立し民営化することで全地区民は合意され、地域の子どもたちのための運営がされている。ソーシャルキャピタルとの関係性としては構造的ソーシャルキャピタルとして「地区の人々の協力体制」が挙げられ、認知的ソーシャルキャピタルとしては「千代のことは自分たちで何とかしよう」という気持ちが挙げられ、その2つが互いに影響し合い千代しゃくなげの会という互酬性集団行動が1例として挙げられると考えられる。

また、天竜川鷲流峡復活プロジェクトチームによると、天竜川鷲流峡復活プロジェクトは天竜川にある竹の手入れをする人がいなくなり、竹が自由に伸びてしまう環境になっていたことがきっかけで天竜舟下りの元船頭さんであった曾根原宗夫さんが竹林伐採バスターズとして活動を開始し、その後企業、行政も賛同し天竜川鷲流峡復活プロジェクトも発足させた。この活動のソーシャルキャピタルとの関係性としては公民館をはじめとした住民や企業などと行政を結びつけるたくさんの仕組みが存在するというネットワーク、課題解決を支えてくれる人々との繋がりや関係する人々を紹介する行政や住民の存在という信頼社会と社会的仕組みがあり互酬性の規範として幼い頃から地域の課題に参加する地域ならではの強みがあることに加え、楽しむことに重きを置く本プロジェクトのあり方がさらに参加を促進しているとしている。

更に、国際りんご・シードル振興会チームによると、国際りんご・シードル振興会はシードルの普及を目的としたワイン醸造経験者と地域の活性化を目的とした様々な飯田市の企業とりんごの需要拡大を目的とした新規農業就労者が、異なる目的を持っていたが最終的な目的はシードルの普及という目標で一致したことで発足した。ソーシャルキャピタルとの関係性としては創立メンバーが集まったこと、喜久水にりんごを提供する農園が9か所あることなど一つの活動により多くの協力者を集める要因としてソーシャルキャピタルが飯田市では発展しているということが大きくかかわっていると考えられるとしている。

それぞれの活動の比較をすると、千代しゃくなげの会では結束型のソーシャルキャピタルが働いており、天竜川鷲流峡復活プロジェクトでは橋渡し型のソーシャルキャピタルが働いており、国際りんご・シードル振興会でも橋渡し型のソーシャルキャピタルが働いていると考えられる。

社会的信頼、互酬性の規範、ネットワーク、社会的仕組みを兼ね備えている飯田市では豊かな市民活動が行われていると学ぶことができた。

私は今回の事例で千代・千栄地区に参加しました。この学びの中で私たちのグループは地区の人々の協力体制が構造的ソーシャルキャピタル、地区内でのつながりを大切にし、自分たちでなんとかしようという認知的ソーシャルキャピタル主に2つの要素から千代しゃくなげ会が作られたと考えました。この2つソーシャルキャピタルと市民活動の関係について私なりの解釈は以下の通りです。まず、構造的ソーシャルキャピタルとの関わりとしては保育園設立のために1戸1万の寄付金を地区内全ての世帯から集めたこと田植えや地域の食材提供からなる食育から地区内での強固な協力体制が敷かれていることが分かります。次に、認知的ソーシャルキャピタルとの関わりとしては保育園存続の危機に迫った時にすぐに民営化しようと動き出したこと、1戸1万の寄付を集めることができたことから、市民たちが地区内のことを自分たちでやろうという意識が深く根付いていることがわかります。他の事例でも飯田市では人や地域間での繋がりが非常に大切にされ、小さい時から地域の問題解決に参加できる関係が作られていることが分かります。しかし、千代しゃくなげの会では地域課題に住民全員のベクトルを揃えるのに対し、天竜川鷺流峡復活プロジェクトでは曾根原さんの思いに賛同する人がどんどん加わってプロジェクトが大きくなっていました。国際りんごシードル復興会ではベクトルの違う人たちが話し合い力を合わせることで大きなサイクルが作られました。

飯田市で今回調査した3つのような市民活動が活発が行われるのは深く根付いてきた人や地域のつながりや課題解決に当たり前のように参加する市民意識によるものです。他の地域でも同じような活動ができるかについて、千代保育園の理事長の関口さんもおっしゃっていましたが、私も同様に難しいのではないかと考えます。どうしても人口の違いで地域の協力体制に差が出てしまい、その土地ごとの価値観も異なるからです。しかし、「市」単位でなくて「地域や自分の周り」から少しずつつながりを作って例えばゴミの問題とか些細なことでも周りの人と話せば皆で一緒にという考えが作られ、飯田市のような市民活動ができるようになるのではないかと考えます。また3つのプロジェクトでもベクトルやプロジェクトの基となる価値は違います。ですが、当たり前のように参加する基盤ができていることが拡大の最大の要因になっていることから他地域でもこのような基盤作りが極めて大切であることがわかります。

では、私の住んでいる松川でできることは何でしょうか？まずどうしても必要になるのは地域や周りとのコミュニティ作りです。事前のアンケートでわかったことは軽い立ち話や挨拶はするが、お互い助け合うほどの関係ではないことです。松川町の各地域では自治会や育成会などの地域ごとの活動が活発なことに加え、町内の社会スポーツクラブに老若男女多くの人が参加していました。ですが、最近は参加人数が減ってきて活動をやめる地域が多くなっているそうです。つながりやコミュニティ作りの機会がたくさんあるのでもっと生かしていくべきではないかと考えます。

私は学輪 IIDA 共通カリキュラム ソーシャルキャピタルフィールドスタディに参加し、講義や事例調査を通して、ソーシャルキャピタルとは何か、また飯田の市民活動の経験や成立にソーシャルキャピタルがどのように関係しているかを学びました。その中で私が理解、実感したことは3つあります。

1つは自分の事例調査や飯田まちづくりネットワークの桑原さんや飯田市役所の下田さんの話から、飯田では認知的ソーシャルキャピタルと構造的ソーシャルキャピタルがどちらも豊かであり、それが飯田の市民活動の成立に大きく関係しているということを実感しました。私は「千代しゃくなげの会」の事例調査をしました。「千代しゃくなげの会」は園児数減少により地区内の2つの保育園の統廃合を市より提案されたことを受け、2つの保育園の存続のために、地域を上げた取り組みにより、基本財産 1000 万円を地域住民 1 戸 1 万円の寄付などで調達し、立ち上げられた社会福祉法人です。理事長の関口さんは 1000 万円を集める時、全ての住民に理解してもらうことは簡単ではなかったが、説明会、勉強会を、行政、自治会、保護者会、地区民を交えて開いた事や、千代地区に根付いていた『自分たちのことは自分たちでなんとかしなければならない』という考え方が、すべての住民の理解につながったとおっしゃっていました。

また、桑原さんや下平さんの話では、飯田にはお互いに支え合い、何かやる時は一緒になって取り組むという「結の精神」、自分ができることからやってみるという「ムトスの精神」を表す言葉があり、地域住民自らが、まちづくりの主役として主体的に関わろう、失敗しても責めずみんなで地域を盛り上げていこう、考え方があること、また、飯田市は住民自治を土台とし、主役は住民、行政はサポートといったまちづくりをしているということを知りました。

「千代しゃくなげの会」の事例と飯田のまちづくりの考え方どちらからも、『自分たちのことは自分たちでなんとかしよう』『お互い様だね』『みんなで助け合おう』といった認知的ソーシャルキャピタルと、地区の人々の協力体制、行政のサポートの仕方といった構造的ソーシャルキャピタルがどちらも豊かであること、さらに、2つのソーシャルキャピタルが豊かであることが、それぞれの要素をより強化し合っているということを理解しました。人形劇フェスタで 2000 人のボランティアを集める事ができるのは飯田だからできることという話が最初は理解できなかったけど、このようなことがわかるとすごく飲み込みやすくなりました。

2つ目は他の事例と比較しながら、自分が担当した事例の相対化を行い、理解したことです。私の担当した地縁型である「千代しゃくなげの会」は千代地区内だけという内部指向的な活動で、住民を大きく巻き込んでいるのに対し、テーマ型である「天竜川鷺流峡復活プロジェクト」「国際りんご・シードル振興会」では行政、企業、地域、NPO など様々な人が関わり、目的をもって幅広く展開しているという違いを理解しました。

3つ目は飯田市がこのソーシャルキャピタルの豊かさを維持していくにはどうすればいいのかソーシャルキャピタルの学び全体を通して実感したことです。私は、年齢が上がるにつれ、飲み会や近隣での交流、地域行事などが多いこと、地域の役員を引き受けて親が忙しくなることが嫌だと思える事が増えました。また、大人が集まる会に私が参加する必要はないのではないかと思いますようになっていました。しかし、今回の学びを通してそのような事がソーシャルキャピタルの維持、発展に繋がっているのだということを実感しました。そこで、めんどくさいと思って関わることをやめてしまうのではなく、このような市民活動を続けていくことで生まれる関係を大切にしていきたいと思いました。

今回、初めて対面によるプロジェクトの参加になりましたが、実際に飯田市の市民の方、市役所役員等、色々な人と関わり、お話を聞いたり、講義で驚いたことは、市民の考え方でした。私も飯田市と似た地方で暮らしていますが、講義では、飯田市の公民館の数が他県に比べて圧倒的に多いこと、「公民館する」といった、初めて耳にするような言い回しがあること、このようなギャップを感じる出来事は、講義を聞いた時だけでなく、フィールドワークのグループを組んだ際に、地元トークを一緒になった地元高校生の方としましたが、彼女の家族が日頃から公民館を訪れて市民同士の交流を行っている事や、彼女自身も小さな頃からそれが習慣化していること、なにより私が選択した天竜川鷺流峡復活プロジェクトの会長である曾根原さんと彼女が昔からの顔見知りであったことが判明し、飯田市の市民同士の結び付きの強さを感じる瞬間でした。

そんな彼女を含むグループが私の選択した天竜川鷺流峡復活プロジェクトですが、しゃくなげの会、国際りんご・シードル振興会とある中でしゃくなげの会と同じ「地縁型」でした。このプロジェクトに関しては、「NPO 法人いなだに竹 links」の活動も含まれていますが、元々は船頭であった曾根原さんが有志で始めた「竹林伐採バスターズ」としての活動がきっかけで発足したものです。船頭を務めていた曾根原さんが NPO 法人を立ち上げるまでに至った背景には、彼の性格や熱意、人脈によるところがかなり大きく感じますが、飯田市（竜丘区）の地域住民の理解や市役所の協力も大きな要因の一つです。

船頭として天竜川鷺流峡の四季折々の美しい景観を「商品」としていた曾根原さんですが、その景観を壊す不法投棄のゴミ、そして不法投棄の原因として挙げられたゴミを捨てるにはうってつけの人目のつかない放置竹林、この放置竹林を何とかするために初めは竹の伐採作業に始まり、伐採した後の竹の再利用として、筏作りやメンマ製造、バイオマスエネルギーとしての竹ボイラーや、その熱を利用した足湯、肥料として土に還元する等、様々な活用方法ができました。例えば筏作りは、竜丘地区の小学校で、毎年小学 6 年生が総合の授業で竹林伐採体験の後筏作りに取り組み、作った筏を学校のプールで浮かべ、校長先生をはじめ、取材に来た記者や役所のお偉いさんに乗せては筏を揺らしてプールへ落すというイベントが存在し、校長先生等をはじめ大人を落とせることから、6 年生の特権として、これを楽しみにする小学生は非常に多く、下級生は、6 年生になることが楽しみであるそうです。このイベント自体は、船頭さんが伐採竹で自作した筏で川下りをしていた所を地域住民が目撃し、商品化の要望を受けたことで、始まり、総合の授業で竹伐採する小学校のプールイベントも小学校側からのリクエストであることから、地域の連携や、地元住民の理解も得られていることが分かります。他にも竹 Links の活動としては、例えば豊丘村に新たにできる道の駅の一角に竹ボイラーを使った足湯を設置したことであり、足湯の効果で、道の駅滞在時間が増加し、売上が上がった実績もあります。テレビの取材や公演が増えたことにより、活動が幅広く知られるようになりました。

このように、天竜川鷺流峡復活プロジェクトは地元住民の理解や協力で成り立ったものであり、地元の小学生が関わるだけでなく、地元の大人たちも関わりますが、竹林伐採も 1 つのイベントとして開催され、参加案内のパンフレットも Web で誰でも確認できるなど、同じ地縁型であるしゃくなげの会と比較すると、規模は少し大きいように感じました。ソーシャル・キャピタルとしては、地域住民の縁であるところに大きな差はないと考えます。

一方、テーマ型である国際りんご・シードル振興会は、農家同士の繋がりや強さにはありますが、人間関係がソーシャル・キャピタルである地縁型と比較すると、りんご並木が有名であることからりんごの方にソーシャル・キャピタルを感じました。

今回の飯田市ソーシャルキャピタルF Sを通し、まち歩きや市のイベント紹介、私の担当した天竜川鷺流峡復活プロジェクト等の事例調査をする中で、「ソーシャルキャピタル」という概念について様々な発見があった。ソーシャルキャピタルについては私たちB-1 班の発表でも市のヒューマンキャピタル等について少し触れたが、個人的に気付いたこと、別の観点から着目した点もあったため、取り組みを終えた今、本レポートでそれらについて総括しようと思う。

まず、飯田市の持つ「関わりしろ」の大きさに興味を持った。「飯田市長講義」の事前学習資料にて、飯田市が2023年の「住みたい田舎ベストランキング」総合部門1位を獲得したということであり、評価されたポイントとして「飯田市の『関わりしろ』づくりが充実している」という点が挙げられていた。F S内で配布されたパンフレットでは人形劇フェスタの宣伝、竹林整備プログラムへの勧誘など、市民が活動を通じて楽しみながらもまちづくりに参加し、伝統や自然の保護に繋げようとする狙いが伝わった。また直接携わることが無くとも、初日に目にしたりんご並木に大火災からの復興という背景があることなど、これまでに行われてきたまちづくりの結果が目に見える形となり、周知のものとなっている点も好印象であった。個人的に印象深かったのは、私と同じ班で活動して下さった地元の女子高生の方が、事例調査でお世話になった曾根原さんとその活動を事例調査前から知っていたことであった。小学生の時にイベントで関わる機会があったそうで、地域内の人々の結びつき、人脈の広さに衝撃を受けた。

次に、飯田市の様々な活動を学び、小さな自治体における地方自治の利点を知ることができた。飯田市の人口は約10万人と長野県の中では上位であるが、しゃくなげの会発足などからも分かるように少子高齢化の進行や補助金の打ち切りなどの課題も市に存在する。そのような窮地の中で天竜川鷺流峡復活プロジェクトでは竹林伐採への参加の呼びかけ、竹を利用した新たな産業の育成を目標に掲げ、しかも本当に実現したことには心を打たれた。「先が見えない中で事業を進めるのは不安では無かったのか」という私の質問に対し、曾根原さんは「『とりあえずやってみる。駄目ならやめればいい。』の精神で自ら先導して活動に取り組んだことで、熱気が人々へと伝染したのだと思う」と答えられていた。人口や顔なじみの少ない小さなコミュニティであるからこそ、長が率先して行動することで活動の知名度、熱が伝播するのも早いという特性が上手く活かされたことが背景にあるようであった。また金銭などの報酬を出してでも、参加者に自ら自治体の環境を保護することの楽しさを知ってもらうような活動になるよう取り組む姿勢もあって、次世代へのソーシャルキャピタルの育成も兼ね備えているのだと気づかされた。

最後に飯田市の活動様態について、千代しゃくなげの会や天竜川鷺流峡復活プロジェクトが市に迫る危機を乗り越えるために住民が団結した、言わば「結束型」のソーシャルキャピタルに分類される一方、シードル振興活動は「元々市の持っていた強みを発展させるために住民が団結した」という構図であり、住民を新たに誘い込む、「橋渡し型」に分類されると言える。2種の形式を共に使うことで対外、対内的な結びつきを両立できているところが、前述した「関わりしろ」として市の魅力の上昇に貢献しているのだと思う。また桑原さんのお話にもあったが、明確な目標、結果を求めようとしない方針で行うのも活動の継続に繋がっているようだった。以上より、飯田市のまちづくりが成功した要因は、それがソーシャルキャピタルという考え方を意図したものでは無かったとしても、各リーダーの思いが上手く住民の心を掴んだことだったのではないかと私は思った。

●事前学習やオリエンテーションを通して

私は事前学習を進めていく中でソーシャルキャピタルがどのようなものか曖昧な理解で調査を進めていた。過疎化や少子化が問題とされるであろう地域でなぜこうした活動が継続できているのか分からなかったが、特に、事前調査の中で気になった点が2つあった。

飯田市は公民館活動が全国的に見ても圧倒的に盛んで地域のコミュニティの厚みが魅力である。この点で社会的信頼やネットワークといったソーシャルキャピタルの要素を必然的に拡充することになったと思う。

しかし、1つ目に飯田市民が積極的に公民館活動やボランティア活動に参加する理由が疑問点として挙がった。私達の地域ではこうした活動はあるものの、当事者意識は希薄でアルバイト代が報酬として払われるようなら参加してみようと思えるくらいで、ほとんどの住民はボランティア活動等に協力的ではないと考えたからだ。

2つ目は、思いやりの精神や助け合いの精神はどのようにして育まれているのか。当たり前の環境をつくり、公民館活動が盛んな地域となった理由に興味を持った。

以上に2つに重点を置いてソーシャルキャピタルフィールドスタディを進めていこうと考えた。

●天竜川鷲流峡復活プロジェクト

このプロジェクトを学習する中で欠かせない人物となったのは天竜川の船下りをしていた企業の船頭であった曾根原宗夫さんである。飯田市の観光名物であった天竜船下りを不法投棄のゴミで悪化した景観を元に戻し、観光客に楽しんでもらいたいと自ら活動を始め、竜丘自治振興センターへと飛び込んだ。同じ課題を持っていた自治振興センターも協力し、さらに竹林による竹害や、景観について同じ意識を持っていた地域住民もこの活動に参加をするようになった。これを可能とした要因は曾根原さんの行動力にある。プロジェクト発足後についても竹イカダや竹ボイラーといったインパクトのあるモノをプロデュースし、それに興味を持った小学校や道の駅、メソマづくりや竹灯籠でのイベント、これらを維持していくためのサポートを行う団体など地域全体を取り巻いていった曾根原さんの行動力や人柄の効果は絶大であった。

しかし、それだけではプロジェクトが進行することはなかったと思われ、自治会や公民館を通じたコミュニティの強さがあること、街をより良くしたいという思いや街への危機感、助け合いの精神、地域の帰属意識が結びついている。これらは、ソーシャルキャピタルの部分に当たる。また、プロジェクトに参加することで、竹で遊ぶことや足湯などの娯楽、新しいコミュニティを形成できること。自分の住んでいる地区の景観が向上することから人材(ヒューマンキャピタル)を取り込むことに成功している。地域密着の中で帰属意識が生まれ、それがソーシャルキャピタルを醸成していること。また、街をより良くしたいという思いにつながっている。

●最後に

今回のフィールドスタディを通して、飯田市民が公民館活動やボランティア活動に積極的な理由は、「シビックプライド」によるものであることが分かった。

その他の事例においても千代しゃくなげの会であれば少子高齢化という課題に対する危機感から生れたものであり、自分もその地域の一人であるという帰属意識があったことで寄付金を集められた。リンゴシードルであれば、リンゴ農家さんのリンゴに対する思いから街の進行のために

も国際的な取り組みに発展した。リンゴ並木の活動に対しても、街のシンボルであるリンゴを大事にしていこうという意識がそこにあるからだと考えた。天竜川鷲流峡復活プロジェクトとの違いとしては一人が多くの人を巻き込んでいく影響力があったことである。

大都市圏のような住民の出入りが多く、街への愛着が少ない地域では飯田市のように取り組むのは難しいことである。天竜川鷲流峡復活プロジェクトのように小学校や自治体、行政が協力し、参加機会の場を設け若年層や高齢者の当事者意識を高めていく土壌作りが重要になってくるのではないかと考えた。こうした地域での当たり前はソーシャルキャピタルを育み、未来の人材育成にもつながる。飯田市のような温かみのある地域づくりが重要で、こうした温かみは「シビックプライド」につながり、ソーシャルキャピタルの土壌を作る。地域の人々の当事者意識が生まれ、飯田市のような地域に発展していくという学びになるフィールドスタディとなった。

学輪 iida ソーシャル・キャピタルフィールドスタディへ参加をして、私は天竜峡鷺流峡復活プロジェクトの事例について学習し、現地でその状況と話を聞いてきました、飯田市に在住してはいましたが、飯田市で公民館活動又は地域住民との関わりがとても密接に深い関わりをしていることを初めて知ることが出来た

鷺流峡復活プロジェクトは地域の環境問題を地域住民が自治会に改善を要請し、その結果課題解決が出来た事例であった。課題発見は舟下りをしている船舶の方からで、景勝地である鷺流峡のゴミ問題や、放置化された竹林の影響で景観が破壊されているというものであり、発見後は本人達から竜丘自治、自治会から地域住民へと広がりボランティアとして多くの方に賛同もあり、現在は法人化している。法人化後も景観整備、また後継者等、輪を広げ活動の幅を広げている。

- ・ゴミの回収に多くの地域の方が集まり協力する
 - ・放置竹林の伐採のためにも地域住民を初めとして、地元小学生の授業の一環として、また伐採出来たものを別の授業で活用する。
 - ・伐採された竹をボイラーや、メンマなどの別の用途を模索、活用し、観光資源化とする。
- など、本来の活用方法とは違ったものを生み出し、地域にとって害だったものが、社会的価値を生み出し成功していた竹や景観が、物的資本となり、それを支える市民の方が人的資本となり、この飯田市竜丘にソーシャル・キャピタルの形成に繋がっているそのような資本を支える上でも常日頃からの市民活動や、地域コミュニティがとても重要な点になると考えられる

千代しゃくなげの会では、鷺流峡のプロジェクトとは異なり地域全体で地域の活性化を目指しているものである。少子高齢化が進んでいる千代千栄地区では、子供が少ないなどの理由から若い世代の他地区への移住が多くあり、そのような課題を改善すべく設立されたものである。保育園等の育児施設等の運営、高齢者施設の運営を主に行っており、この施設の建設には市民から寄付金を集め設立したものである。そのような点から地域全体でこのような社会問題やこれからの未来のためにお金を寄付する市民の行動から地域コミュニティが深くあり、地域を良くするために市民全員が行動している点では鷺流峡の復活プロジェクトとはまた違った良さを持っている。国際りんごシードル振興会では日本での流通消費の少ないシードルの普及を目的として設立された機関である自分も初めはシードルというものを知らなかった、農家、醸造所が連携し、日本、飯田市でシードルを普及させるための活動を行っており、地域イベントや、試食会などで拡大を図っている。そういった企業や、日本全体からの協力を得ている点では鷺流峡のプロジェクトとは異なる点だと思う。

私自身はこの飯田市という所に生まれてから住んでおり、飯田市の社会活動の活発さ、地域住民同士でのかかわりがとても深いというのを今回初めて知った。自分にとっては当たり前で過ごして来た事だったため、どのように何を知り、学ぶのが初めは分からなかった。しかし、大学生の方や、地域へ出た時に今まで自分の気づけなかった飯田市の良さに気がつけた。また、ソーシャル・キャピタルの学習を通して自分の知らなかったしゃくなげの会や、りんごシードルについて知ることができ、学ぶこともできとても良い経験となった

このレポートでは今回の飯田市におけるフィールドワークで私たちが見出した飯田市において、市民活動を活発化させているソーシャルキャピタルについて考えていきたい。

今回私は天竜川鷺流峡復活プロジェクトの事例調査に参加した。このプロジェクトは、竹の大量発生と、それに伴って増加し続ける鷺流峡への不法投棄による景観悪化、いわゆる「竹害」を阻止するため、地元の川下り事業を行なっている企業と住民、行政が一体となって課題解決にあたったプロジェクトである。このプロジェクトはまさに企業と住民、行政の3者がそれぞれしっかりと役割を持って進められたプロジェクトであった。このプロジェクトを成功させた要因となったソーシャルキャピタルについて分析していきたい。ソーシャルキャピタルの要件は大きく分けると三つあり、ネットワークの存在、信頼社会と社会的仕組みの存在、互酬性の規範である。プロジェクト成功の要因としてまず、飯田市では公民館活動が活発であり、住民、企業と行政を結びつけるたくさんの仕組み、土壌が存在しており、ソーシャルキャピタルの要件の一つである豊かなネットワークが存在していたことが挙げられる。また、世代を超えて人々同士の繋がりが強く、プロジェクトを進める際にも必要な人材とのつながりを住民や行政が作ってくれることもソーシャルキャピタルの一つと言えるのではないだろうか。そして、本プロジェクトにおいて小学生も巻き込んで活動が行われていることからわかるように、住民は幼い頃から地域の様々な活動に参加し、地域の課題解決に参加すると言うことがごくごく普通に行われており、これも飯田のソーシャルキャピタルの一つなのではないだろうかとは私は考える。

りんごシードルの事業も農家の人たちの横のつながりが契機となって始まったことなど、りんごシードルの事業にもこのプロジェクトとの共通点を見出すことができるのではないだろうか。また、千代地区の保育園に関しても、町全体で子供を育てているという意識が住民に共通しており、世代などの垣根を超えて住民同士の繋がりが強いことがこのプロジェクトとの共通点として挙げられるだろう。

多くの人の市民活動に対するモチベーションを保つことや様々な世代の人たちに参加してもらうは並大抵のことではないしそれを持続させていくことはもっと難しい。そういった中で飯田市では先述したソーシャルキャピタルが、市民活動を持続的で多くの人が参加しやすいものになっているのではないかと考えるのではないだろうか。

これらの十分すぎるほどのソーシャルキャピタルに加えて、やはり、飯田の市民活動の成功の要因として、本来世の中の流れで薄くなってしまわずの住民同士のつながりを、活発な公民館活動のサポートをはじめとする行政のサポート、介入、援助によって保っている点をあげることができるのではないだろうか。

このプロジェクトをはじめとする飯田市の行政や企業を巻き込んだ市民活動のあり方は、地域の共同体のつながりが浅くなり昔のような「共助」を行うことが難しくなっている現代社会に新たな地域コミュニティのあり方を示しているのではないかと私は考える。

天竜川鷺流峡復活プロジェクト

天竜川流域のごみ問題に目を向けごみ拾いをしている際に、竹による景観悪化が原因であると認識し、曾根原さんを中心とする船頭有志数人で竹林伐採を開始した。竹林伐採による、ごみのポイ捨て減少や景観改善が目的であったが、伐採した竹を竹いかだや竹ポイラーに活用するなど活動は広がっていった。事例調査で曾根原さんは、「使えるものは全部使う」ということが自分の性格であるとおっしゃっており、とても情熱を持って活動されていると感じた。竹を大切な資源と捉え、無駄にしないという考え方が活動の発展に大きく関与している。

さらに曾根原さんのこの考え方がソーシャルキャピタルの構築にも大きく関わっていると感じた。活動を広げていく中で、できないことがあればできる人に頼ることで新しいネットワークを構築し、飯田の人々の元々持っていた技術やノウハウも巻き込んでいく。竹をメンマとして加工するというアイデアを実現しビジネスとするために、食品加工会社との連携が生まれた。また、出来上がったメンマを地元の学校の生徒が販売したり、竹いかだ体験を行うことによって、地域の中での学習の機会や交流が増えた。また、活動について知る機会があることによって学生が竹林について問題意識や当事者意識を持ち、プロジェクトへの関心が高まる。このように、今までに構築されてきた人々のつながりがある中で、さらに地域や企業、学校などの異なる組織間をつなぐ橋渡し型SCが構築されることによって活動が認知され、発展してきたのだと感じる。

このようなプロジェクトの発展により、市民団体としての活動では取まらず、曾根原さんはNPO法人いなだに竹Linksを立ち上げた。これまでは県や国からの補助金が活動を支えていたが、NPO法人の誕生により、メンマの売上で資金を調達し、自分たちの活動の資金を自分たちで賄うことになった。国の補助金が無ければできない活動はしたくないという曾根原さんの思いがとても印象的だった。そして、さらなる雇用の場を創出し、同じ熱意を持った人々とのつながりを形成した。また、学生ボランティアを立ち上げ、地域内だけでなく全国から学生を募り、竹林伐採の技術を習得することにより、後継者の育成を図る。この活動でも、飯田の人々の当事者意識が評価され、地域内外から意欲のある学生がボランティアに加わり、土地に縁のない人々とも新たなソーシャルキャピタルを構築している。

他の事例との比較

千代しゃくなげ会での活動では、千代地区の園児減少により国や県からの補助金が打ち切られる中で、千代地区の住民が保育園の必要性を再認識し、自分たちで何とかしようというムツの精神が原動力となった。「地域の子どもとお年寄り地域の手で守り、育てる」という基本理念や1戸1万円の寄付で資金を調達したことから、天竜川鷺流峡復活プロジェクトと比べ、地縁をベースとした結束型SCが強く働いていると感じた。

国際りんご・シードル振興会の活動では、シードルの普及やまちの活性化など、元々異なる目的を持っていた人達が協力し創立メンバーとなった。異なる組織間での連携や巻き込まれやすさがある点において、天竜川鷺流峡復活プロジェクトと似ているものの、異なった目的を持った人々が意見を揃えシードル普及のために活動するという点で違うプロセスをたどっていると感じた。

公民館活動とソーシャルキャピタル

地区公民館では、娯楽やレクリエーション、社会教育や生涯学習としての活動上の機能がある

が、誰もが参加できる意見交流の場としても活用されている。それらが助け合いの心や地域の絆という互酬性の規範を創出する場となり、地域を担う人材育成の場やまちづくりの拠点として機能している。飯田市の公民館では、行政ではなく市民による問題提起により、市民が主体となって課題解決に取り組み、行政はあくまでも支援するという形で関わっている。そのため、市の職員が公民館での事業をサポートしており、行政と市民の距離が近く、協働のまちづくりが実現している。このような構造的SCとしての公民館が「地域を良くしたい」「課題を行政と協働で取り組んでいきたい」という認知的SCを育て、その思いが公民館をさらに維持していくという補完の関係にあるといえる。

ソーシャルキャピタル・フィールドスタディを通して飯田市の住民同士のつながりの強さを実感した。近所はほとんどが顔見知りで、いざというときにはお互いに助け合う関係性があるということを実泊を通して知ることができた。地域と関わる機会により、小学生や高校生など若い世代も当事者意識や愛着が培われ継承されていると感じた。

天竜川鷲流峡復活プロジェクトに参加して学んだこと

今回のフィールドスタディでは千代しゃくなげの会、天竜川鷲流峡復活プロジェクト、国際リング・シールド振興会の3つの事例調査があり、私は天竜川鷲流峡復活プロジェクトに参加した。今回のレポートでは天竜川鷲流峡復活プロジェクトで学んだことを記述する。

天竜川鷲流峡復活プロジェクトが発足した背景としては、企業側と住民、地域の共通の課題がある。それは、不法投棄による景観悪化だった。企業はこの問題に対処するために汚染地域の清掃を行ったが効果があまらなかった。そこで、竹を切りゴミを捨てづらい場所にしようと考え、そのためには地権者との交渉に助けが必要だが、企業側で対処することができず、助けが必要な状況だった。企業の他にも、住民・地域もこの問題の解決に動いた。有志の方々が竹林バスターズと名乗り竹の除去作業を行ったが限界があり、他者の協力が必要だと考えた。両者の抱えるこれらの問題を解決するために行政、地域、企業が協力しあう天竜川鷲流峡復活プロジェクトが発足したという背景があることを学んだ。問題を解決するために行政、地域、企業が協力しあうことで、地域にある社会的なネットワークを構築することができる点がソーシャルキャピタルに関わっているのではないかと私は考えた。

天竜川鷲流峡復活プロジェクトでは様々な活動が展開されている。竹林の伐採、維持管理、地域とともにガードレール洗浄・ゴミ拾い、竹いかだ作りといかだ下り、筍堀り・メンマの製造・販売、純国産メンマによる新たな食への展開、竹林伐採・運搬体験とメンマ原料の収穫体験、小学校で竹いかだ作り体験・プールで竹いかだ乗り体験、竹林整備をした場所から一本桜や、約80年前の先人が植えた紅葉群の発見から地域の観光資源の1つにするために紅葉のライトアップの挑戦などの活動がある。これらはいずれも地域資源や人的資源が関係しており、社会的土壌であるソーシャルキャピタルに関わっている活動だと私は考える。ソーシャルキャピタルには、柔らかい土壌として信頼社会と社会的仕組みが結びついたものとされているが、人と地域が互いに信頼しあっているからこそ、この復活プロジェクトが成り立っていると考えられることから天竜川鷲流峡復活プロジェクトには柔らかい土壌が形成されていると考える。ソーシャルキャピタルに関連して、曾根原さんの言葉である「楽しみながらやる」という言葉が結果的にはいろいろな人を巻き込むことにつながった点はソーシャルキャピタルの一部である互酬性の規範に関わっていると考えられる。プロジェクトが活発である理由に曾根原さんは、飯田市の公民館の活動が活発で、基本的に自主的に行なっている人が多いと仰っていたことから、この言葉からも互酬性の規範が形成されていることが伺える。

自分が参加したが流峡復活プロジェクトでは、活動が成立していく過程の中で、様々なソーシャルキャピタルが関係していた。まず課題の認識と周知という面では、事業者側のみが問題を認識しているだけではなく、行政や地域の人にそれを共有できる場が無ければいけないが、飯田市には地域ごとに公民館と自治振興センターが設置されており、地区の住民には公民館活動、行政には自治振興センターを通じて問題を提起することができる。こうした仕組みが存在することで、地域の問題を広く認識させることが可能となり、プロジェクト設立に至る大きなきっかけを作った。課題に気づいた市民がそれに対する解決策などを提起する場として、活動の発展に大きく関係していると考えられる。また市民側は、プロジェクトが始まる以前から曾根原さんと協力して竹林伐採に取り組んだり、住民との合意形成に積極的に動くなど、問題解決に向けた動きを行っていた。こうした動きの背景には、竜岡地区が昔から小水力発電に近いような設備を作った過去があるなど、地域の問題は自分たちで解決しようという思いが根付き続けていることが大きな要因であると考えられる。こうした当事者意識の強さは、千代しゃくなげの会の活動成立にも大きく関係しており、特に地区単位での活動成立には必要不可欠であると考えられる。さらに曾根原さんは、本来なら捨てられてしまっていた竹を用いて、循環可能なリサイクルを発案したり、人々が楽しめるコンテンツを発案したりすることで、外部の人々にも活動の認知を行っていた。こうした外部への取り組みは、りんごシードル振興の中でも、市民への周知や、海外との交流を中心に行われており、さらなる活動の発展や後継者づくりなどには必要不可欠であると考えられる。さらに事業を発展させる中で、竹の循環型の利用だけでなく、竹からメンマを生産しそれを販売して利益を得ることで、プロジェクトの持続や発展を自分たちの力だけで行うことが可能となった。この活動の成功にあたって、まずメンマを作る上では初期の段階で地元の公民館で料理教室を開いている人に協力を頂いていた。自治の場である公民館で活動を行っている人だからこそ活動に巻き込むことができたといえる。その後実際に製品を作ってもらうために、行政側が今まで連携を行って来た地元企業に協力を取り付けていた。これは飯田市では行政と事業者が多く連携をし、協力し合う関係を保っているが故に行えたことだと考えられ、行政が仲介し事業者や市民団体同士を結び付け易い体制は、市民活動成立に大きく関係しているといえる。またただメンマを製造するだけでなく、地元の小学校と連携して小学生に竹林の伐採からメンマの販売までを体験してもらうというプログラムを実施し、竹林伐採活動やメンマ製造の認知を行っている。子供たちへの教育には、環境活動の体験を与えることや、が流峡復活プロジェクトに興味を持ち将来活動に携わってくれる人材を創出することが大きな目的であり、事業の持続性を高めることに大きく関係したものであると考えられる。活動への参加者創出という面では、NPO 法人いなだに竹リンクスを設立してからも力を加えており、活動を幅を広げていくことで関係人口を作る場を増やしている。全体を通してソーシャルキャピタルに関して、構造的な面では公民館など事業者と市民、行政を結びつける機関の存在が連携の円滑さや課題の認知を促し、市民主体の活動を行いやすくしていると考えられ、認知的な面では自分たちの地域の問題を自分たちで考えるという精神が活動の原動力となっていると考えられる。飯田市では、こうしてネットワークの構築や団結がなされ、市民主体の活動がなされていくと考えられる。しかし活動の発展、継続のためにはネットワークをさらに地域内外へ広げ、関係人口を増やすのが必要不可欠となり、飯田市においてもこれは今後の課題にもなってくると考えられる。

今回のフィールドスタディで、私は天竜川鷲流峡プロジェクト、NPO 法人いなだに竹 Links のお話を聞きに行きました。今回聞いたお話の中で、地元の小学校の竜丘小学校で竹の伐採や竹筏づくりの体験をしているというお話をお聞きしました。このような活動を小学校で行うことで、地域の課題を知ったり、このような活動の楽しさを知ったり、いろいろな人とかかわることでソーシャルキャピタルの要素の一つである社会的信頼や、互酬性の規範（同じような催しに参加したくなる）につながると思います。なので、小学校や中学校でいろいろな体験をし、興味を持つことがソーシャルキャピタルにかかわってくると思います。私の通っていた座光寺小学校では、お茶摘み体験や人形劇の作成、りんごへの参加、お米作りを行いました。この中でも特に人形劇は、人形劇フェスタで発表しました。これによって、人形劇への関心を高め、人形劇フェスタのボランティアに参加しやすくしていると思います。また、コロナの影響で行われていない時もありましたが、小学校で廃品回収を行ったり、今は有志で行っていますが、どんど焼きを行ったりすることで社会的信頼につながると思います。そして、回覧板などでインターネットに疎いお年寄りの方々も、子供たちも地域の催しを知ることができていると思います。これがネットワークにあたると思います。地区の集会や運動会、夏祭りも他人とのかかわりを深めるのに役立っていると思います。このような活動が重なっていくことで、ソーシャルキャピタルが蓄積され、人形劇フェスタやりんごのような活動に結びついてくると思います。ほかに、私の住んでいる地区で行われたゴミ拾いには多くの人が参加していました。これもソーシャルキャピタルがあったからだと思います。

また、ほかの事業との比較は、千代しゃくなげの会は、完全に地域だけの事業でした。地域の問題は地域で解決しようという思いで活動が行われ、デイサービスセンターも作られました。国際りんごシードル振興会は、シードルを共通点として人がかかわって活動していました。最初は目的が違った人たちがシードル普及を目的として活動していました。家は果樹を作っているので、シードルの講習会に父が行ったことがあったので、シードルの存在は知っていましたが、振興会まであるとは知りませんでした。私が行った天竜川鷲流峡プロジェクトは、地域の竹の問題から様々な竹に関する問題に変わっていきました。最初はしゃくなげの会と同じで、後半はシードル振興会と同じです。最初の天竜川のプロジェクトやしゃくなげの会のような地域の問題にかかわるものは、地域や地区の行政がかかわっていて、その中心に各プロジェクトや会がいるイメージですが、後半のプロジェクトやシードル振興会のような何か中心にあるパターンのものは、それにかかわる人が活動していることが分かりました。地域に関する活動は、地域内でのかかわりや、ソーシャルキャピタルが大きな役割を果たしていると思います。シードル振興会などは、同じものに関する関係者（農家、酒造など）のかかわりやソーシャルキャピタルが大きな役割を果たしていると思います。なので、同じソーシャルキャピタルでも、地域内のものと、同じ業種内のものとの2つがあると思いました。そして、その両方が必要だということがわかりました。

飯田市のまちづくりの精神は昭和22年4月20日に起こった大火の復興を願い、自らの手で街を作っていく飯田のまちづくりの原点となるりんご並木を作る活動から始まった。この活動は地域に対する誇りや自分のまちを自らで守り、育てようという思いを育み、まちづくりの基本精神をもたらした。この活動を経て、今飯田に根付くまちづくりの精神として結の精神とムトス精神を掲げている。結の精神とは、「共同労働の田」を意味する言葉であり、お互いに支えあって何かやる時は一緒になって取り組むという精神だ。また、ムトス精神とは広辞苑の最後末の言葉である「んとす」を引用しているもので、自発的な意思や意欲、具体的な行動を表した飯田の地域づくりの合言葉である。ようするに、みんなとやる、自分でやるというような考えを地域住民が持つことによって、地域住民自らが、まちづくりの主役として主体的に関わる要因となっている。この精神を持っている人が多いと実感した活動があった。それは、公民館活動である。飯田における公民館は地域自治組織としての位置づけにあり、地域住民が主体的に活動を行い、それが良い影響を及ぼす。この流れができてから飯田の住民は主体的な精神を持っているといえる、と私は考える。さて、私の班が担当した調査事例は、国際りんご・シードル振興会と伊藤農園で、両サイドからヒアリングを行った。まずシードルとは何かを説明する。このお酒はりんごを原料とした発泡性果実酒である。味わいはほんのりと甘く後味がすっきりしていてワインと比べると飲みやすく、梅酒と比べると飲みにくい、と感じるような味である。さて、なぜ飯田でこの活動が始まったのか、それはお酒が好きであった飯田市の職員がおり、その人が飯田のりんごを映画にしようと話をもちかけた。その話が地域の活性化をしたい人やりんごの需要拡大を狙っている人に広がり、異なる目的を持った人達がシードルの普及という目標で一致したことで、任意団体として、NPOりんご・シードル振興会が立ち上げられたという経緯がある。立ち上げた当時、シードルの知名度は低く、飲用者や愛好者もほとんどいない、地元では作っていない、ゆえにシードルに対しての知識もないという状態であった。そのため、ポム・ド・リエゾン養成講座というシードルの知識を習得する活動や委託醸造を受け入れてもらうことで、地元産のシードルの創出、シードルと祭りをコラボや、飲食店にシードルを持ち込むシードルBYOなどの取り組みで、シードルを飲む機会の創出を行った。これらの活動は実を結び、シードル活動は今も広がっている。生産者側の話では、やった方が面白いし、活動が成功することを願っている、との好意見がありつつも、シードルだけではやっていけない、まだまだこれからとのことだった。まだまだ思うがやった方が良く、楽しいと判断し、実行する精神は飯田が地域として育んできたものであり、飯田が持つ豊かなソーシャルキャピタルが地盤にあることでここまでの活動を行うことができたと感じる。果たして私の地域では可能だろうか？そう考えることがこれからの地域を作っていく自身に必要なことであると気付かされた。他班との比較をしてみると、まず同じテーマのC-2班はネットワークを課題としていて、会話の必要があると結論を出した私達の視点とは少し違う結果であり、そこも言われてみれば問題点かもと思うような良いものと感じる。天竜川のプロジェクトを扱った班の要点が抑えられたまとめ方で、人々を巻き込んでいくという点では似ているものの、より大きな幅広いネットワークを持っていると感じた。しゃくなげ会をまとめた班は世代間交流のメリットをよく知ることができ、また地区の人々との連携があつてこそその取り組みであり、違った視点の繋がりというものの実態を少しつかめたような気持ちになった。

ここでは私が担当した調査事例である「国際リンゴシードル振興会」を中心に、そこで行ったヒアリング調査を用いて、飯田の市民活動の経験や活動の成立にソーシャルキャピタルがどのように関係しているのか、理解、実感したことを振り返るとともに、他事例との比較を踏まえた担当事例の相対化を行う。

そもそもソーシャルキャピタルとは、何なのか。それは、互酬性の規範や社会的信頼、それに基づく社会的なネットワークを指し、ソーシャルキャピタルが豊かに蓄積されている社会では協調行動がとりやすいことを踏まえながら、事例調査に臨んだ。

ヒアリング調査のための一つ目の訪問先として、喜久水酒造さんを訪れた。ここでは、国際リンゴシードル振興会の発足への流れ、生い立ちを知るべく以下のような質問を投げかけた。「異なる目的を持つ人々がどういう経緯でシードル普及を目標に思いを一致させたのか」。これに対し、取締役営業部長である後藤さんは、「何度も会議を重ねたが、一番は参加した人々のリンゴによる新たな食文化の形成に向けた思いの強さ」と語っていた。振興会の取り組みは、発足から急速に発展していった。その輪の広がりがこのテーマに惹かれる人々のネットワークにより、人を引き寄せ、飯田のソーシャルキャピタルの構築に大きく関わっていると感じた。

二つ目の訪問先としてシードルづくりに原料のリンゴを提供する伊藤農園さんを訪れた。ここでは、「なぜシードルという新たな取り組みに個々のリンゴを提供し、協力しようと思ったのか」という質問を行った。これに対し、伊藤さんは「加工用のリンゴの需要が出始めた頃に、昔のよしみ・顔なじみであった後藤さんから声がかかったから」と語った。また、そこに参加する際に「将来性は見ておらず、面白そうだったから」とも語っていた。この言葉からはただ声がかかったからというお互いの信頼関係に加え、取り敢えずやってみるという行動力の高さも実感した。また、そこにはリンゴ生産以前からの地元のコミュニティ、地域的なネットワークが形成されていたことにより、農家同士でも話題になることがあったようだ。

このヒアリング調査だけを見ても、飯田市民には各々との社会的信頼や各人が持つネットワークによる共感を呼ぶような新たな取り組みの際の人の巻き込み・巻き込まれやすさを実感し、これにより飯田に根付くソーシャルキャピタルが市民活動と密接に関係していることが理解できた。

私の担当事例は、他事例の地縁型とは異なり、テーマ型で市民との関わりが見えづらい部分があった。しかし、今回訪れた企業、農園だけを見ても飯田市民が持つ強い当事者意識とそこに根付く市民活動とソーシャルキャピタルとの深い関係性がうかがえた。その関係性は、飯田に起こる問題や課題に対し何かをやろうとする時、人のもつネットワークを介し、大きな力を発揮しているのではないかと考える。

本レポートでは、南信州フィールドスタディに参加して学んだ飯田市のソーシャルキャピタルについて考察する。また、今回ヒアリング調査をした国際りんご・シードル振興会と、発表を聞いた千代しゃくなげの会、天竜川鷺流峡復活プロジェクトを比較する。

初めに、実際にヒアリング調査をした国際りんご・シードル振興会の活動から考えられるソーシャルキャピタルについて論じる。国際りんご・シードル振興会とは、シードルの振興、地域の活性化、りんごの需要拡大という三つの異なる目的を持った人が集まってできた NPO 法人である。この団体とソーシャルキャピタルは二点で関わりがあると考えられる。一点目は創立時のエピソードから考えることができる。この振興会ができた当初、創立メンバーの六人は上記のように目的が異なっていた。それにも関わらず一つの目標に向かってシードル振興の活動を進めることができたのは、何度も話し合いを重ねたからだということが調査からわかった。これは、自分が持つ目的だけを考えていたり、学ぶ姿勢、話し合おうという姿勢がなかったりすればなし得なかったことである。二点目は、ポム・ド・リエゾン認定試験の取り組みから考えられる。シードルについて学ぶ講座、試験を開設したことで、人材育成と同時にシードルに関わる人々の連帯感のベースを作ることができたという。連帯感があることで何か行動を起こしたいと思った際に協力体制が取りやすくなるのではないかと考えられる。

次に千代しゃくなげの会、天竜川鷺流峡復活プロジェクトと比較する。千代しゃくなげの会は、園児が減少したことで市から廃園するか民営化するかという選択を迫られた際、地域住民が協力して約一年にわたって話し合い、民営化を成功させた事例である。これが成功した要因は、普段から自分たちのことは自分たちでやるという意識を持ち、草刈りや交流会を行っていたことで既に社会的信頼があったことが考えられるという。また天竜川鷺流峡復活プロジェクトは、天竜川鷺流峡での不法投棄、放置竹林という課題を解決するために、NPO 法人を立ち上げ、事業をビジネスとして確立した事例である。この活動が成功した要因は、地域と行政が協力する土壌があったことで両者が上手く連携できたことにあると考えられるという。国際りんご・シードル振興会とこれらの事例の相違点の一つは、信頼感が作られた過程だと考えることができる。前者は元々関わりがほとんどなかった人が集まり話し合いを重ねることで徐々に信頼感が生まれたと言えるが、後者は地縁的なつながりがあり、地域活動が盛んであったため信頼関係が元々存在していたか、築きやすかったと考えられる。一方で共通点としては、どちらの事例も公民館活動が盛んな地域で学びの意欲が高く、「自分たちのことは自分たちです」という思いが根底にある飯田市中で生まれたプロジェクトである。これらの特徴こそが三つの事例の成功に大きく影響しているということが理解できる。

本レポートでは、国際りんご・シードル振興会、千代しゃくなげの会、天竜川鷺流峡復活プロジェクトという三つの事例からそれに関わる飯田市のソーシャルキャピタルについて考察した。その結果、飯田市のソーシャルキャピタルは古くからあった公民館活動を初めとする地域活動と、学ぶ姿勢や自分たちのことは自分たちでやるという意識があることで成立したものだと考えられる。

飯田市では、ほかの地方と比べて地域やご近所同士での繋がりが強く、その背景には、地域やご近所の人々と簡単にコミュニケーションを取ることができる環境が整っていること、田舎特有の人と人の距離の近さがある。実際に、長野県にある公民館などの地域の人が集まり利用する施設の数、全国平均を大きく超えており、全国一位である。また、今回話を聞かせていただいたりんご農家の方の話の中には、「この地域ではいい意味でいろいろなことが筒抜けで、おせっかいな人が多い。」というお話もあり、このお話からも飯田市特有の人と人の距離の近さや繋がりが強いことがわかる。また、飯田市は行政が中心となって動くよりも、市民が中心となって地域をよりよくしていこうとする動きがあることが分かった。飯田市の人は「自分がやろう」と考える人が多く、その考え方が、市民が中心になって動く飯田市民特有の在り方につながっていると考える。お話を聞いた飯田市の方は、「大切なのは平場であること。広い世代が同じ場所に集まって対面で話をして、お互いが平等な立場で思ったことはそのままに言い合える話し合いの場であることが重要。」ということをおっしゃっていた。こうしたことができるのも、人と人の距離が近く、コミュニケーションの取りやすい飯田市だからこそ実現できることなのではないかと考えた。他にも、「文化を楽しむことがまちづくりにつながる。文化を楽しむことに行政やまちづくりのための法人などが協力することで市民団体が持続可能になっていく。」ともお話していた。現に飯田市で行われているいいだ人形劇フェスタでは、世界でも大きい人形劇のお祭りであるにもかかわらず、多くの飯田市民がボランティアとしてフェスタに参加しており、市民主体となって運営している。私自身がボランティアとしてフェスタに関わったときにも、ボランティアの方たち自身も飯田市の文化に触れ、楽しみながら参加し、人形劇という飯田市の文化に誇りを持って活動しているように感じた。また、私自身も飯田市の文化に誇りを持つことができた。以上のことから、飯田市民が中心となって行動するのは、自分がやろうと考える人が多いこと、市民が市の文化に触れる機会が多いことが関係しているのではないかと考える。調査で話を聞いた方たちの話で共通していたのは、様々なジャンルで活動している人たちが共通の目標に対して一丸となって取り組んでいたことである。シードルについても、シードルの普及という目標に対してりんご農家の方や酒造の方たちが協力してシードルづくりに取り組んでいた。また、楽しみながら活動に参加していた点も共通しており、失敗も次に生かしていけばよいと考えていた。他の事例とも比較すると、どの事例にも地域や協力している人に対しての信頼を持っていることが分かった。シードルという知名度の低いものをつくるのは、りんご農家の方の協力なしには出来なかったことであり、強い信頼関係があることがわかる。他の事例でも地域のお年寄りや子供の施設のために直接関係のない家庭からも集金や寄付を募り、多くの家庭が協力したことからも、地域などに対しての信頼感が強いことがわかる。以上のことから、飯田市は、人と人の距離が近く、コミュニケーションが取りやすいため、地域や市の活動や文化に触れる機会が多く、行政と市民が協力してよりよいまちづくりを行っていること。問題を自分のことのようにとらえる人が多く、一つの目標のために様々なジャンルの人が協力して楽しみながらとりこんでいることがソーシャルキャピタルに関わっていると考えた。

シードルを作るにあたって数多くのリンゴ農家の方々がりんごを提供してくれた。リンゴ農家の方々のコミュニティがあり、情報交換が盛んにおこなわれていて、シードルの話が広がりやすかった。振興会のきっかけも違う場所で働いていた人たちが一つになって振興会を立ち上げた。南信州シードルの認知度や興味度を高めるためにお祭りや飲食店との協力等をしている。→ソーシャル・キャピタルが強い

飯田市のシードル産業において、ソーシャル・キャピタルは重要な要素であることが明らかになりました。リンゴ農家との連携や消費者コミュニティの形成がシードル産業を続けるにあたってとても重要な要素となっています。また、振興会発足の時に特に見られた話し合いという部分も地域社会の強い特徴といえます。シードルや地域への思いから何度も話し合いをし、シードル振興会ができ、その後の発展に繋がったといえます。リンゴ農家同士の話し合いも多いので情報が早く伝わり、沢山のリンゴ農家の方がシードル作りに協力してくれたといえます。振興会の最初のメンバーは異なるベクトルの人たちだったので普通なら振興会を立ち上げるというのは難しいと判断されますが何回も話し合いを重ねて立ち上げたというお話、農家さん同士の日常的な会話の中の情報交換のお話を聞いて、飯田市にはしっかりと社会的土壌があるなど感じました。シードルの知名度は振興会のイベントなどによって上がって来てはいるがまだまだ広く浸透していないと感じました→地域住民とのネットワークの形成が必要 ポムドリエゾン養成講座ではリンゴ農家以外にもシードルの愛好家、興味を持ってくれた方など色々な方が集まっています。飯田市のネットワークの強さと広さを感じました。また、シードルのブランド化にも様々な団体が協力をしていて飯田市ならではのつながりやすさ協力しやすさを感じました。生食用のリンゴだけでなくシードル用のりんごを作ってくれているという点でリンゴ農家さんもシードルに協力的に動いてくれているのだなど感じました。お話を聞いているときにリンゴ農家さんと地域の方のコミュニケーションがあり地域間のネットワークの強さや繋がりが強いということを実感しました。シードル振興会の方もリンゴ農家さんもシードルが広がってほしいという気持ちは同じだとわかりました。リンゴ農家さんが下に落としてしまっているリンゴの活用方法を編み出してほしいとおっしゃっていたのでシードルだけでなくリンゴを使ったほかの産業の発展も必要だと思いました。

飯田市のシードル産業は地域社会との協力関係や広いネットワークを通じて活性化と発展を遂げているといえます。しかし、知名度向上の課題や農家さんの後継者問題などに対しての解決策が必要だと感じました。飯田市のソーシャル・キャピタルの強さを活かしてシードル産業を発展させていってほしいです。

・他の事例との比較

千代しゃくなげの会 自治会、保護者、児童課で会合を重ねたという点はシードルと同じお年寄りや園児の交流という世代を超えての交流はシードルでは見られなかった。

天竜川復活プロジェクト 地域の人と協力して活動を始めるところはシードルと同じとりあえずやってみるという部分はリンゴ農家さんの言っていたことと似ている後継者の部分がシードルにはあまりなかった。

振り返り 今回フィールドスタディを通して、自分が住んでいる町にはまだまだ知らないことがあったということに気づかされました。飯田市には全国トップレベルの数の公民館があり、その点が豊かなソーシャル・キャピタルが形成される要因になっているのではないかと思います。

天竜川プロジェクトでは天竜川周辺にゴミや不法投棄があるとはしらなかったし、しゃくなげの会では子供の数がそんなに減っているのかと改めて少子高齢化の事実を目の当たりにしました。そして調査をしたシードルは大勢の人達の協力で支えられていて、飯田市の暖かさを実感することができました。

私は国際りんご・シードル振興会の事例について調査した。

国際りんご・シードル振興会は、シードルの普及を目的とする人(1人)・地域の活性化を目的とする人(4人)・りんごの需要拡大を目的とする人(1人)の6人が創立した団体である。本来このような異なる目的を持ったメンバーが集まった場合、全員が納得いく目標を定めることは困難なはずだが、この6人は度重なる話し合いでシードルを普及させることが全員の目的を達成するために最適であるという結論に辿り着くことができた。これは、この6人が話し合いを十分に行える機会や関係性があったからこそ出来たことであると考えている。国際りんご・シードル振興会の最初の活動は2014年のポム・ド・リエゾン養成講座であり、参加者は定員を上回る45人だった。私はなぜ2013年に創立してから1年も経たないうちに45人も集めることが出来たのか疑問に感じた。ヒアリング調査の結果、将来性の観点から生食用のリンゴのみを生産することに危機感を感じていたりんご農家が多く参加したことや、シードルに関して知ることができる講座はユニークで希少性があり好奇心を持つ人も多かったというのが45人集まった理由だということが分かった。ポム・ド・リエゾン養成講座などの国際りんご・シードル振興会の様々な活動が短期間で広まった要因として、りんご農家同士のつながりなどといったソーシャルキャピタルの存在に加えて、活動が農家や醸造所などの多くの人々を巻き込んだという点が大きいのではないかと感じた。しかし、南信州のシードルはまだまだ発展途上であり、今後地域ブランドを立ち上げることや品質の向上が必要であるということがヒアリング調査で分かった。それをしていくうえでの課題も調査で明らかになった。それはりんご生産者と国際りんご・シードル振興会の人たちの間で、シードルへの意識に差があるという点だ。ヒアリング調査を行ったりんご農家の方は「なんか面白そうだと思ったから」という理由でシードル生産に協力しており、ブランド化に対して協力的というわけではなかった。今後シードルをブランド化するという目標をりんご農家の人々と共有することができれば、事業への協力者やネットワークが強化され、シードルの普及という大きな目標を達成するのに一歩前進することが出来ると考える。

国際りんご・シードル振興会と他の事例に共通して言えることは、活動が広がった要因として、ネットワークなどのソーシャルキャピタルが充実していたという点と参加することへの楽しさややりがいが存在するという点の両方があったということだと思う。地域活動においてソーシャルキャピタルは非常に重要なものであるが、それに加えて企業や市民の好奇心をくすぐるような魅力を持っていることも活動を成功させる上で必要だということを感じた。ソーシャルキャピタル＝社会的土壌ということを事前学習の際に学んだが、その社会的土壌をうまく利用するのか、無駄にしてしまうのかはその人次第であるため、国際りんご・シードル振興会の成功は豊富なソーシャルキャピタルと活動のユニークさ、創立者の方々の強い思いなどの様々な要素がかけ合わさった結果であると考えている。

今回実施された飯田での FS において、飯田の市民活動がどのような特徴を持っているのか、また自治活動が盛んである背景を学ぶことができた。

飯田市は市民による社会活動が非常に盛んであり、文化・伝統の維持や学習に前向きである。これは、飯田市の公民館活動が活発であることも要因であると考えられる。飯田市の公民館は、数の多さだけでなくその機能にも特徴がみられる。飯田市の公民館は、教育の場としての役割と地域自治組織としての役割を果たしている。またその中で、ソーシャルキャピタルに必要なネットワークと互酬性の規範、社会的信頼が住民間に形成されているのである。私の住む地域にも公民館やコミュニティセンターはあるが、幅広い年代が集ったり学習の場となったり、飯田市のように機能しているとは思えない。飯田市民はこのようにして地縁に基づいた互酬性の規範を得、積極的に社会活動に参加するのであろう。

今回の FS では 3 つの事例を調査し、それぞれのソーシャルキャピタルとの関連性を考えた。りんごシードル振興会の事例はテーマ型であるため、ソーシャルキャピタルと直接的に結びつけることは少々難しい事例であった。しかし、発足時の 6 人が全く違う業界の人間であったことや、彼らが集まり話し合うことによってシードルという可能性を見出したことなどから、人的資本や地域資源をネットワークによって結びつけることが成功した事例であると考えられる。

ヒアリング調査では喜久水酒造株式会社の後藤さんと、伊藤農園の伊藤さんから話を伺った。テーマ型の事例であることも要因であると思われるが、私はお二方のシードル産業振興への意識に差が見られたように感じた。シードル産業は未だ発展途上であるが、農家の方々の中にはあくまで「りんごを供給している」ということ以上の意識をお持ちでない方も多くいるのではないだろうか。私は、このような事例において飯田市のソーシャルキャピタルは産業を進める上での潤滑剤のような役割を果たしていると考えられる。飯田市内のコミュニティ、ネットワーク、また互酬性の規範が作用し、創立メンバーや協力者を集めることが可能になったのではないか。シードル振興に関わる人々の中で飯田市のソーシャルキャピタルを活かすのであれば、農家の方と製造者、振興会の方々の対話によって、農家の方へもシードルを飯田市の名物にしていこうという方向性をきちんと理解してもらうことで、当事者意識をより持ってもらえるかもしれない。

他の事例は、地域が主体的に行動を起こし、地域の問題は地域で解決、また資源を循環させようという意識が感じられ、飯田市のソーシャルキャピタルが活かされていると感じた。3 つの事例は、何らかの形で(規模は違えど)地域内で資源を循環させ、地域で人材を集めるという点で共通しており、これは飯田のネットワークや社会的信頼、互酬性の規範によるソーシャルキャピタルがあってこその特徴である。どの事例においても、飯田のソーシャルキャピタルは発足時やネットワークの形成、その後のプロジェクトの維持などの場面で形を変えて役立っており、地域内活性化に拍車をかけているのである。

私は今回のフィールドスタディで、市民活動の成立とソーシャルキャピタルの関係について研究した。また、個人的に地域に根付いた事業にも興味があったため、ソーシャルキャピタルに基づいた事業についても着眼しながら今回のフィールドスタディに参加した。

まず、フィールドスタディに参加するにあたっての事前研修ではソーシャルキャピタルがどのようなものなのかについて学んだ。ソーシャルキャピタル（社会的資本）とは社会的な土壌のことを指し、その社会的土壌が豊饒であれば社会的果実である豊かな市民活動が次々と生まれるのである。パットナムの定義によれば、ソーシャルキャピタルは互酬性の規範・社会的信頼・それに基づく社会的ネットワークの3つを指し、共通の目的に向けて効果的に協調行動へと導く社会組織の特徴のことである。長野県飯田市は公民館の数が全国で最も多く、このソーシャルキャピタルに基づく市民活動が多く展開されている。そのため、ソーシャルキャピタルはどのように形成されているのか、そしてどのような形で市民活動にかかわっているのかを調べるために長野県飯田市でのフィールドスタディに参加した。

フィールドスタディでは大きく3つのパートで学びを得た。①飯田市について②国際りんご・シードル振興会について③農家民泊の3つだ。

まず飯田市についての学びでは、中学生によるリンゴの栽培や街並みの見学を通して地域住民の市民活動への貢献や飯田市の歴史について学んだ。

次に国際りんご・シードル振興会についての学習だ。ここでは喜久水の酒造やリンゴ農園で振興会の関係者の話を伺った。ここで分かったことは、ソーシャルキャピタルをもとに構成された事業の成り立ちだ。長野県が名産地であるリンゴを使った地域の振興のために酒造が農園に声をかけて国際りんご・シードル振興会が創立された。この振興会創立の際にはワイン醸造の経験があった飯田市職員・シネマウェブ責任者（文具販売会社社長）・NPO いいだ応援ネットアイデアのメンバー（旅行会社社長・まちづくり会社役員・酒飯店店主）・リンゴ栽培をする新規農業就労者の計6人が各々の目的をもとに集った。その目的は「シードルの普及」「地域の活性化」「リンゴの需要拡大」と別々のものだったにもかかわらず、その地域のつながりの強さをもとに同じ目標のもと集まった。つまりソーシャルキャピタルに基づく事業展開である。また、リンゴ農園を営む方の話であったようにこの提携についての話は円滑に進んだことや提携している6つの農園同士もある程度のつながりがあることなどからも地域のつながりの強さがみられた。さらに振興会の事業展開においても、意見の食い違いなどはあったものの話し合いなどが定期的に行われて一つの方向性を決定したと聞き、創立から展開までの流れにソーシャルキャピタルが深くかかわっていることを知ることができた。

農家民泊で私が宿泊した家庭は3つの事業を行われており、経営者としての立場の方からの話を聞くことができた。もともとはご自身も移住者だったそうで、飯田市に来た際に市が運営する移住者交流会に参加した際にその交流会で行政の一方的な事業への物足りなさを感じたことがきっかけで自分の事業を始めたと聞いた。最初に事業をされていた時には、外部からの一方的な事業になってしまっていて市民の方には受け入れられづらいのが現実であったことを受けて、現在では地域住民とのつながりを重要視して事業を行っていると聞いた。その事業理念や内容を聞いて、地域住民だけでなく移住者や私たちのような外部からの訪問者にとっても意義のあることをされていることがわかった。

今回のフィールドスタディで私はソーシャルキャピタルやそれに基づく事業について体感した

がら学ぶことができた。その中でも課題はまだまだあることも分かった。例えば国際りんご・シードル振興会ではブランディングや品質向上などが挙げられており、それに対する取り組みも行われていた。これを受けて、これからは「ソーシャルキャピタルを活かした他地域での事業展開」「ソーシャルキャピタルに基づく事業の課題」などを研究して、ほかの地域活性を探っていきたい。

私はこのフィールドスタディーの事前学習で飯田市の公民館活動は県外に比べると突出して活発に行われていることに興味を持った。私は日頃下伊那郡や飯田市で暮らしているため公民館が市民主体なのは当たり前のことで今まで興味を持つことすらしなかった。しかし大学生の皆さんと探究していくうちにこの意外性に魅力を感じ何が原因でこのような環境に至っているのか自分なりにだが探究中に考察してみた。

まず初めに飯田市に住む人々の考え方だ。これはリンゴシードルの探究の時や1日目の現地調査などで自分で体感しただけではなくほかの探求グループの話聞いてさらに実感した。それは、市民の皆さんは飯田を自分たちがよくしているという行為に誇りがあり、さらに同じ地区に住む市民や近所の人との繋がりが深く、お互いの日常支えあっているということだ。例えば飯田市民の一人が飯田をよくする活動を行いたいと活動し始めるとする。そうするとその人と関わりの深い人がその人の活動に参加・協力し、さらにその人とかかわりの深い人が…と、どんどん活動の輪が広がっていき、その結果今の飯田の市民主体の活動が盛んにおこなわれ、参加者や協力者となる人が多く存在しており、ほかの県と比べても突出して市民活動が多くなっているのだと考えた。

さらに、私が一番興味深かったのはリンゴシードルのコース別探究の際のリンゴ農家さんのお話だった。私たちが質問で「なぜリンゴをシードルとして加工する許可を出したのか」という質問の際、「自分のリンゴを使って何か飯田を盛り上げてくれるようなものができたら嬉しいから」と、農家さんは答えた。そもそもなぜこんな質問をしたかという、果物などを加工されるのは、農家にとってはどんな商品になるかわからない・その商品がおいしくなかったら自分の育てている果物の価値や知名度が下がってしまうかもしれないという危惧から、普通は加工用を委託されても嫌がる農家が多いと聞いたからだった。しかしこの日行った後藤農園さんは「飯田のためになりたい」という思いからシードル用加工りんごを納品しているそうだ。さらにプロジェクト参加の理由のもう一つに「喜久水醸造さんと以前から交流があった」ということも関係していた。この二つの話から私は飯田のつながりの深さや市民の活動力の深さを典型的に感じたが、ネットワークの薄さという欠点もあると感じた。私が普段飯田市で生活する中でも感じていることだった。公民館でどんな活動が行われているのかよくわからない時や、いつ公民館が開いているのか、今利用している公民館のスペースが使えないときはいつなのか、まったく情報共有が行われていないところがある。ひどいところではホームページで調べたにもかかわらず内容と違った情報のことが行われていたり、開館していなかったり、途中でいきなり帰らされたりしたことが何度もあった。これは市民活動の欠点だけでなく、飯田市の欠点であると考えた。

最後に私たちのグループとほかのグループの相違点だが、何ととっても異業種が連携していることにある。ワイン醸造経験のある飯田市職員、シネマウェブ責任者、NPO飯田応援ネットメディアのメンバーから新規農業就労者など様々な職種が集まり、6人で国際りんごシードル復興会が発足された。このメンバーはシードルの普及、地域の活性化、りんごの需要拡大と、異なる目的を持った人々が集まったがシードルの普及として目的が合致したものだった。このように、他のグループでは「保育園の存続」「天竜川の景観や竹問題についての取り組み」という同じ目的で動いているが、りんごシードルでは目的はほとんど違う・職種も違う人々が集まり1つのプロジェクトを行っているのだ。このような人材が集まったのもやはり飯田市民の人間性やつながりの深さが原因だと私は推測する。

私は、リンゴシードルの調査や、街歩き、いろいろな方々のお話を聞いて一番強く感じたことは、若いうちから自分の住む町について知っておくことは、重要であるということである。私もそうだが、今の若い人たちは、市民活動に参加することをあまり好んで進んでやらない傾向にあると考える。なので、自分ができることからまずはやってみるという自ら進んで地域とかかわりに行くという自発的な意思と意欲が求められているのだと感じた。しかし、今回の調査でも感じたことだが、高校生が、大学生、大人たちの間に積極的に話に入っていくのは少し難しいと感じたので、世代を超えて、みんなが対等に話すことができるような空間作りが必要だと感じたし、今後の飯田市の若者が積極的に地域活動に参加したいと思えるような街作りが必要だと考える。例えば、学校の活動にもこのような地域の人たちに話を聞きに行くという時間を取り入れたり、飯田市のことについての探究活動をしたりすれば自分が今まで知らなかった飯田市の新しい一面を発見することができ、少し自分が住んでいる街に興味がわくのではないかと考える。これがソーシャルキャピタルの蓄積による国民活動の影響である民主主義の機能化につながるのではないかと考える。また今回のリンゴシードルの調査を通じて、後藤さんが、飯田市職員や、文具販売会社の人や、街作り会社社員の人などいろいろな職種の人達を巻き込み、飯田のシンボルであるリンゴを使って、飯田だけのリンゴシードルを作って、地域活性化に取り組んでいることに、はじめは意見の対立もあったようですが、最終的には意見をまとめて一つの目標に取り組んでいったことに後藤さんの信念を感じた。シードルを知る、体験する、かかわる、人を増やすということにソーシャルキャピタルを感じることができた。さらに育成講座などを開くことにより、人材育成と同時に連帯感、連携のベースになったと聞き、国際リンゴシードル振興会では、設立、発展の中で飯田市の社会的土壌を生かして事業が進んできたのだと感じ、人と人との密接なかかわりや社会的信頼によって成り立っている事業だと感じた。この調査から私は、何か事業を成し遂げたいなら、人と人との信頼や、かかわりが重要になってくるのだと感じることができた。しかし、リンゴ生産者へのヒアリングから、シードルの生産には協力的だが、あまりその事業に期待をしていないのではないかと感じた。リンゴ生産者の中にもそれぞれリンゴを生食用メインで売りたいとか、加工して売りたいなど加工にはあまり協力的じゃない人もいることが分かった。私は、リンゴ生産者はみんな加工に協力的なのかなと思っていただけ、みんながみんなそうじゃないと知り、驚いた。また、リンゴ生産者同士のつながりの強さも感じる事ができた。リンゴ生産者同士は話すことが日常的にありそこから情報を得ていると聞いていた。このことから、農家同士のかかわりは強いが、シードル企業とのかかわりはあまり強くはないのかなとも感じてしまった。なので、農家とも情報交換ができるように、日常的に話をして、詳しく情報を共有できるような時間をこれから作っていくことが求められているのかもしれないと思った。また、天竜川がりゅうきょう復活プロジェクトは、曾根原さんが、とりあえずやってみる。失敗したならやめればいい。と、竹の問題の見方を変え、地域の人たちと楽しんで協力できるような事業を提案し、地域の人たちに参加してくれたことへの報酬を渡すことは、有限ではあるが、地域の人たちが取り組みを通して、成功体験を得ることで、以降の取り組みにも意欲がわく。という考え方はその通りであると思った。リンゴシードルとの共通点は、どちらも飯田の地域活性化を目指しており、人と人とのつながりで事業がなり立っているということである。私も将来いろいろな人と、手を組んで活動したい。